325
180

始

ヲ1149

佛心凡心一體錄

攝護庵圓輪師述
平松理英校補

大正
2. 5. 20
内交

佛心凡心一體録

攝護庵　圓輪寮司述
平松　理　英校補

第一、會

すでに行者のわろきこゝろを、如來のよき御こゝろと、おなじものになしたまふなり、このいはれをもて、佛心と凡心と一體になるといへるは、このこゝろなり、これによりて、彌陀如來の遍照の光明のなかに、おさめとられまいらせて、一期のあひだは、この光明のうちにすむ身なりとおもふべし、さて命もつきぬれば、すみやかに

大科分ちて二とす初に佛心凡心一體を明す二に體の所由を辯ずるに

初に二に同心の益を辯ず

眞實の報土へおくりたまふなり。

御文二帖目第十通目の御示、この御言に就て、法話に及ぶに、大科を分ちて二と爲す、初に佛心凡心一體を明し、二に光明の益を明す、初の中に二、初に一體の所由を辯ずるに二、初に同心の益を辯じ、二に轉變の義を辯ず、今は初なり。

先初に佛心凡心一體と申すは、直に信心決定する事で、次上の御言に『夫當流親鸞聖人のすゝめましますこころの一義のこゝろといふは、まづ他力の信心をもて肝要とせられたり、この他力の信心といふ事を、くはしく知らずは、今度の一大事の往生極樂は、まことにもてかなふべからずと、經釋ともに明に見わたり』と、斯く仰かけられて、次

にそれをうけて『されば、その他力の信心のすがたを存知して、眞實報土の往生をとげんとおもふについても、いかやうにこゝろをもゝち、またいかやうに機をもゝちて、かの極樂の往生をばとゞ可やらん、そのむねをくはしくしりはんべらず、ねんごろに、をしへたまふべし、それを聽聞していよ〳〵堅固の信心をとらんとおもふなり』と問を擧げて、『こたへていはく、そも〳〵當流の他力信心のおもむきと申すは、あながちに我身のつみのふかきにもこゝろをかけず、たゞ阿彌陀如來を一心一向にたのみたてまつりて、かゝる十惡五逆の罪人も、五障三從の女人までも、みなたすけたまへる不思議の誓願力ぞと、ふかく信じて

さらに一念も本願をうたがふこゝろなければ、かたじけなくも、その心を如來のよくしろしめして『と、信心の相を御述べなされて、さて『すでに行者のわろき心を、如來のよき御心とおなじものになしたまふなり、このいはれをもて佛心と凡心と一體になるといへるはこのこゝろなり』と仰られて、佛心と凡心と一體になるといふが、信心決定の事佛心と凡心と一體になるといふは、如來樣の御心と、凡夫の心と一ツになることで、此の一體の義は、餘流でも申すことなれども大に味が違ふ、餘流では、行者がたのむ心を起した處で、如來樣が助けたまふ、そこが佛心凡心一體ちやと心得る、夫では凡夫の心と如來の心と出逢ふ

て、一體となるのなれば半自力半他力となる、當流で仰られる、佛心凡心一體はそうではない、行者のたのむ心も、如來の助けたまふ御心も、まる〳〵如來回向の南無阿彌陀佛の届いた所を、一體と仰せらるゝ、其の當流の一體の所謂を述べて、御聞せなさるゝが唯今の御言也。

御一代記第百六十條に『一心とは、彌陀をたのめば、如來の佛心と一ツになしたまふが故に、一心といふなり』と仰られた、此の一心の御釋は眞要鈔本二十『そのことはりをきゝて、一念解了の心おこれば、佛心と凡心とまつたくひとつになるなり』と仰せられてある、此を受けさせられて、二帖目第九通に『宿善の開發にもよほされて、佛智より他力

の信心をあたへたまふがゆへに、佛心と凡心とひとつになるところをさして、信心獲得の行者とはいふなり』と、此の義を受けて今の御一代記に、一心を釋せられて、たのむ心と助けたまう御心が、出合ふて一ツになるではない、たのむ心が直に如來の御心の届かせられた一念なれば、たのんで一ツになるではない、斯る者を御助けは彼方ばかりとたのむ思ひの起たのが、はや如來の御心と一ツになつた處、そこを今おきかせなされて『行者のわろき心を、如來のよき御心とおなじものになしたまふなり』と、此のなしたまふの御言が、たのむ心がはや如來の御誠のとぐいたのぢやといふ事を顯したまいた御言で『このいはれをもて、佛心と凡心と一體になるといへるは、このこゝろなり』と仰られた、これに依つて全く上の御言が佛心凡心一體のいはれをいふてお聞せなされたお言ぢや。

問ふて曰、そのいはれは聞えたが、行者のわろき心とあれば、わろき心とは、文字に書けば悪心ぢや、如來のよさ御心とは、文字に書けば善心、我等のこの悪心が、如來の善心と同じものにならねば、淨土參りは出來ぬと聞いては、この凡夫が、なか〳〵極樂參りが出來る者ではない、如來の御心は、觀經には『佛心とは大慈悲是なり』と說いてある、例令生身の如來の御眼をくり、ぬく、樣な悪人、生きながら大地がわれて地獄へ沈む罪人にも、取付いて御慈悲の泪をそ

くがせらるゝ如來の御心、然るに今日の我等が、可愛子でも、いふことをきかねば勘當するの、蚤や虱が喰ふてさへ、堪えて居られず、ひねりつぶしても、飽足りのない樣な淺間敷い心、夫が如來の大悲のよき御心と、同じものになれよう筈はない、これは如何といふに。答へて曰、行者の惡き心が、如來の善き御心と同じ物になると仰らるゝのは、この凡夫の惡心が、無上殊勝の大慈悲の佛の御心と、この世から全く同じくなるといふ事ではない、左樣になれば、この凡夫が直に光明放つ樣になれども、迷の相を捨てるまでは、尊い佛の御心と、のこらず一ツになるといふ事ではない、此の一ツになると仰られたは、わが身はわろきい

たづら者、かゝらう島のない身そと、我が機の方を見限りつめて、斯る者を此の儘ながら助けたまふは彼方ばかり、參りましようことの嬉しやと、疑いの晴れた一念が、如來の御心と一ツになりた、佛心凡心一體と申す者ちや。

此の道理をお聞かせなされて、御一代記第二百四十三條に『思案の頂上と申すべきは彌陀如來の五劫思惟の本願にすぎたることはなし、この御思案の道理に同心せは、佛になるべし、同心申すとて別になし、機法一體の道理なり』この御言をよく〳〵味い見るべし、五劫の御思案に同心すればとて、同行が一劫二劫かゝりて、思案する事ではない、彼方の五劫の御思案は、何たる御思案ちやといへ

ば、正信偈には『諸佛淨土の因、國土人天の善惡を覩見して無上殊勝の願を建立し、希有の大弘誓を超發せり、五劫にこれを思惟して攝受す』とある、五劫が間の御思案は、今日の吾人の身の上を御眺めなされて、迚も惡業煩惱は斷ぜられず、一善一行勤める事はならず、行者の方に助かる手がゝりは一ツもないと、見限り果てさせられ、彼方のかたで、我等が往生の願行を選擇攝取こえらびとらせられて、夫を衆生へ與へて、淨土へ迎取らうと落付かせられたが五劫の御思案、これを御和讃では『如來の作願をたづねれば、苦惱の有情をすてずして、回向を首としたまひて、大悲心をば成就せり』とありて、五劫の御思案の打止めが、行者

の機の方を見限り果て、彼方の方で往生の因を成就して、夫を與へて極樂へ迎取らふと落付かせられだが、五劫の御思案の打止め、これに依つて、今日の我等五劫の御思案に同心するとは、行者の方で手を組んで、思案して見る事ではない、如來の五劫の御思案に、選擇攝取なされた他方の御慈悲を聞いて、如來のすてしめたまへるをすて、如來の取らしめたまへるは取れと宣ふ、迚も未來の益に立たぬ我が機を思捨てゝ、助けてくりやうの他力回向の御誠を、斯る者を助けたまふに間違なき事の嬉しやと思取る一念が、五劫の思案に同心したのぢや、是を此の御文の上の御言に『我身のつみのふかきにもこゝろをかけず、たゞ

如來を一心一向にたのみたてまつりて乃至すでに行者のわろきこゝろを、如來のよき御心とおなじものになしたまふなり』とあつて、是が五劫の御思案に同心し、行者のわろき心が如來のよき御心と、同じものになつた處ちやと仰らるゝ、然れば、如來のよき御心と同じものになるといふは、骨の折れた事ではない、論語に子夏といふ人が、孔子聖人に、孝行とはどういふ事を致したが孝行で御座るかと御尋ね申したら、孔子が『違ふことなし』とお答へなされた、親のいふなりになるが、直に親の心に同心するなり、夫が取りもなほさず孝行ちや、如來の仰に順ふて、悪い我身を悪いと思詰めて、其の者見かけて、彌陀が五劫の思案、

永劫の修行をつとめた程に、彌陀に助けられて、淨土へ參れと仰られる、御慈悲を聞分けて、我身をかくらう島のない、此身の上ぞと思切つて、斯る者を此儘ながら御助けは彼方の御慈悲に間違ひない事のアラ嬉しやと、疑ひ晴れた一念が、佛心と凡心と一體となり、如來の善き御心と同じ者にして下された一念で、其の時直に光明攝取の御利益にあづかり、命が終れば眞實報土へ如來樣が送届けて下さるゝとあるが、唯今のお示なり。

第二會

只今聽聞の通り、佛心凡心一體になるといふは、如來のよき御心と同じ者になしたまふ事ちやと、其の御所由をお

聞かせなされる、夫に就いて、佛心凡心一體の法の所由は、唯今申述る通り、然るに愚な尼嘸は、その法の深き所由が届き難い故に、喩を以て之を申さば、親が大勢の子供を持つて、あの子は力が強い故に農業の働が出來る、此の子は利口ぢやに依つて商もなる彼は奉公もなる、此は聟にも嫁にもやれると子供の身の修りを夫々分別して見た處が、末に生れた一人の子が、體は病身なり、心は愚なり、目は見えず耳はきこえず、士農工商の身の活計、何をあてがふても、勤りそうな事は一ツもない、夫故世間中に貰手もない、末には路頭に彳み、筵着るより外はないと思へば、親の慈悲に誰彼の隔はなけれども、活計の叶はぬ片輪の子

程、愈親の可愛さがまさる、寝ても寤めても其の子の身の上を案じ煩つて見ても、外に仕様がない故に、思案の打止めは、兎てもあの子が身の上を、どうながめても益には立たぬ、さらばといふて捨てられはせず、そこで親の誠の心から、其の子の身になりかはりて、親が一ト骨をりて家を立て、暮しの種の金を拵へて、あの子にくれるより外はないと、親の手元で思案が就いて、夫から十年も廿年も、親が粉骨摧身の難義をして、屋敷を買い家を建て、千兩も金を積んで置いて、其の子に向ふて、其方は何も外に生涯の暮しの業はならぬ、とても我が一分で身の納りは叶ぬ程に、其方がために乃公が難義して、家を造り金を拵へた程に、

之を慥に受取つて安堵せよと、親の與へられた家屋敷や金をヤレ〳〵お有難やと、受取つて遣ふ身になれば、そこが親の心に同心するのちや、親の慈悲心と同じ物になつたのちや、夫をば親の心にさからうて、此の商賣をして見樣か、あの仕事をして暮そうかと、治らぬにきまつて居る眼の療治したり、立たぬ脚を立てたいと心配したりするのは、親の心に同心せぬのちや、その分別は親が年來仕盡して、醫者にも談じ、親類にも計つて見たれども、兎ても叶はぬと見限り果てゝの親の心盡しちやから、子の方では、唯有難う御座ると受取るばかりで、親の心と同心し、我が一生の安堵が出來る、今が夫と同事で、法然聖人は『この修

因感果の理を、大慈大悲の御心中に思惟したまいて、空しく年序をつみて、星霜五劫に及べり』と仰られた、智者聖人は或は布施の行を勤むる御方もあり、或は忍辱の行を勤むる御方もあり、或は智慧を磨く御方もあり、又諸佛の淨土へ往生の出來る御方もある、然るに末代濁世の吾人、此の身は底下の凡愚、心は愚癡闇鈍、智慧の眼は見えず、多聞の耳は聞へず、諸善萬行未來の業は一ツも出來ぬ、況や十方の淨土に唯の一佛も、生れさせて下さるく處もない、三界六道の衢に迷ひさまようて、浮む瀨もない此の身ちやといふ事を、五劫の思案に思定めさせられ、此の上は外に仕樣はない、惡人女人になり代つて、彌陀が淨土を莊嚴し

て、淨土參りの因を彌陀の方で拵へて、夫で淨土へ迎取らうと、落付かせられたが、五劫の御思案の打止め、夫を御文には『彌陀如來の因中において、我等凡夫の往生の行を定めたまふ時、凡夫のなすところの回向は、自力なるが故に、成就しがたきによりて、阿彌陀如來の凡夫のために、回向成就したまひて、一念南無と歸命する所にて、この回向を我等凡夫にあたへまします故に、これをもて如來の回向をば、行者のかたよりは不回向とは申すなり』と示させれて、彼方のかたで參る因も、開く證の果も、參る淨土も皆莊嚴成就して、サア女人よ惡人よ、兎ても汝等が手元に助らる手はない程に、此の南無阿彌陀佛を信じ稱へて、淨土

へ參れと、お與へなされる南無阿彌陀佛の名號、アラ有難やかゝる者を南無とたのめば、阿彌陀佛の御助け參らせ貰ふことの嬉しやと落付く一念に、五劫永劫の願行殘らず行者の寶となる是を御文には『南無と歸命する一念のところに、發願回向のこゝろあるべし、これすなはち彌陀如來の凡夫に回向しましまずこゝろなり』と仰せられた然るに此の心では參られまいか、此の氣樣では助かるまいか、こうなりてこそ、あゝなりてこそと、今日まで我身の手許に目が離れず、佛智の回向を信じ兼ねて居りましたのぢや、夫をあなたの方から、其方共の身の上は、彌陀が五劫の間かゝりて、思案は仕盡しておいた程に、我か身の上

に眼をかけず、我をたのめ、彌陀にまかせよと、お示しなされる、如來の御慈悲を、至心信樂已をわすれて、大悲回向のお誠をいたゞく一ツで、未來永却の安堵が出來る。

然れば親の心と一ツになるといへばとて、片輪の子が、親の眼のあかるいや、耳の善く聞へるや、體が自在に働くのが、親と同じ樣になる事ではない、今も如來の御心と一ツになればとて、彼方の御證の境界の樣に、此の娑婆からなる事ではない、此の名號を信じ稱へて、淨土へ參れるある仰に順つて、疑ひ晴れて念佛申す身になりた處が、如來の御心と同心し、よき御心と同じものに成つた處、これをよく〳〵御聽聞申して見ますれば、有難いといふてよあろ

うやら、嬉いといふてよからうか、親の拵へてくれた家屋敷に住んで、親のくれた金を受取つて遣ふばかりで、生涯は樂々とくらされる、夫が受取れぬの、貰ふが難義ちやのといふては居られまい、是程の心易い事がゞこにあらう、如來樣の方で五却永却に、御成就なされた南無阿彌陀佛、助けてくれるの御回向を、お有難やと頂いで、稱ふるばかりで淨土參り、あら心得やすの安心や、あら行じやすの名號や、是程の心易い事が、大千世界を尋ねても外にはない、夫が信ぜられぬの、稱へられぬのといふて、居たのは、己が疑心自力の障りにさへられて、五却永却の御苦勞を、こちらから不足をいふて居たのぢや程に、人のくれぬ物さへ

ほしがる心中でありながら、くれようといふのが、貰はれぬ事はあるまい、智者聖人は發し難き信を發し、行じ難い善根功德を求めさせらるゝのに、如來樣から助けてくれるぞ、稱へよと御與へ下さるゝ南無阿彌陀佛が、信ぜられぬの、行ぜられぬの、有難くないの、嬉うないのと、いふて居らるゝ場合ではない、日頃は兎もあれ斯もあれ、今日より後はお辭宜なしに、助けてくりようの御回向を、いたゞき稱ふるばかりの名號を受取りて、嬉や南無阿彌陀佛有難や南無阿彌陀佛と、稱ふる身にさへなられたなら、如來大悲のお心も休まり、我が身は生死の迷ひを離れ、淨土參りの仕合をいたゞく、爰をよく〳〵思ひしられてあるならば、此の度かぎりに淨土參りを遂げらりようが、何よりの仕合。

二に轉變の義を辯ずるに二初に總じて轉變の義を辯ず

第三會

佛心凡心一體の所由を示すに就いて二ツありて、初に同心の義は、前に辯ずるが如し、二に轉變の義を辯ずるに二、初に總じて轉變の義を辯ずとは、轉變とは轉じ變るといふ事今迄の者が別になる事、多くの人が當流の御教化は、生れたまくの、其の身其の儘で淨土參り、たゞありのまゝに、かざる所なき相にてはんべらんこそ、淨土眞宗の姿なれと仰られ、我身の罪の深きには目をかけずしてこある御教化を、我が得手にとりなして、信の上にも改まるの變

るのといふ事はなき事ぢやと心得て、たのむ一念の時、御助けとさへ落付けば、起行作業はどうでもよいと心得て居る、依つて佛法は一往聽聞しては必ずあやまりあるべし、よく聞け〳〵と仰られる事で、勿論戒も持たず、行も勵まず、出家發心の相ともならず、農人は鍬鎌持ちながら、町人は十露盤持ちながら、奉公仕官する者は其の儘ながら、淨土の往生を遂げる御教化なれば、生れた其の身、其の儘に違いはない、併しながら改めよ嗜めよ、信の上には變らねばならぬぞとある、御教化も亦數々ある、先御和讃では『諸佛三業莊嚴して、畢竟平等なることは、衆生虛誑の身口意を、治せんがためとのべたまふ』と仰らるゝ、アノ諸佛と

云は、阿彌陀如來の事じや、阿彌陀如來樣の御名が、諸佛といふ御名ではなけれども、十方諸佛の智慧も功德も、皆一體に具はりて御座る故に、總即別名で阿彌陀如來樣の事を諸佛とも、十方の如來とも仰らるゝ、爰は猶別段に聞けば分ることで、先此の和讃に、諸佛とあるは、阿彌陀佛の事と定めて、三業莊嚴と申すは、彼方が光載永却の間にお意のまことを研上げさせられ、お口のまことを磨上げさせられ、お姿のまことを磨上げさせられた事、其の如來樣の身口意の三業のお誠を南无阿彌陀佛の六字に成就して、善人も惡人も助けずは置くまいが、畢竟平等の如來の大悲、其の如來の三業莊嚴のお誠を以て、衆生虛誑の身口意

て、今日我等が意も口も姿も、虚は虚偽でうそいつはり、誑は誑惑であざむきたぶろかす、意は邪見驕慢、口はうそばかり、體には殺生、偸盗、邪婬の悪行、其の虚誑の我等が三業を、如來大悲の三業成就の南无阿彌陀佛を以て、治せんがためとのべたまふ治するといふは、退治する事で、此の藥で病が治したといふは、病のなほることなり、然れば如來様の三業清淨のお誠を以て、我等がうそいつはりの身口意の三業をなほしてくれて、極樂淨土へ迎取らうと仰られるが如來の大悲、これによりて、御一代記第、百十六條に、或同行が手次の坊主の不法義を歎いて、蓮如様へお願い申し、彼方のお側に召置かれて、心中をお直し下された

いと願はれた、依つて其の坊主をお側へ召寄せられて、且御教示遊して、其の後在所へお返しなされた、後に彼の門徒が御前へ參りたれば、手次の坊主は、心中がなほりたかとお尋なされた故、佛法の事もお聞せ下されまする、實に有難う御座りますること申上げた、時、蓮如上人の仰に『われはなをうれしく思ふよと仰られ候』と、なほりし者よりは、愚老はなを喜ぶぞと仰られた、又のお言に『色をたて、きはをたてゝ改めよ』と仰られたお言もある、色をたて際をたてるこは、私初聽聞すれば、我が過も思知られ、是よりは改めましようと迄は思へども、今迄念佛も申さずに居た者が、急に朝夕參る様になりたの、又は俄に念佛三昧になり

たの、親に向ふて今迄、あらけない、ことい、ふたのが、忽言を和げて仕へる抔と、打つた處の脹れた樣にはなりかねて、ソロ〳〵となほそうといふた樣な心持で居る、そこを蓮如樣は地獄へ墮る者が淨土へ參る程の大變りぢや程に、惡と機が附いた事ならば、直に色を立て際を立てゝ改めなほせと仰られるなり。

依つて八ケ條の御文に『年々の經といへども、同篇たるべき樣に見えたり』とお歎きなされ、又一帖目文明五年九月のお文には『道俗男女群集せしむといへども、更になにへんともなき體なる間、當年より諸人の出入を止むる』とも仰られた。變とは物のかはることぢや、あの參詣停止のお

文では、へんと假名でお書き遊ばしてある、八ケ條には、篇の字が書いてある、篇の字は書物などの何の篇〳〵といふて、事の變り目を分けるに使ふ文字ぢや。

校補者曰、同へんの說、少く附會に過ぎたり、蓮師の御時代には、漢字の音同き者は、往々假借して用ゐる風あり、御一代記、實語記、御文等其の例尠からず、且この同へんといふは俗語にして、漢字の配當すべきなし、故に或は假字を用ゐ、或は漢字を借用ゐたまひしにはあらざるか。

然れば道俗男女笠を連ね、膝を交へて參詣はすれども、更に變目がないならば、聽聞した所詮はない、何程藥は飲ん

でも利目のないと同事じや。依つて蓮如様は、當年より諸人の出入をとゞむるとあつて、吉崎の御坊へ參ることはならぬと、嚴く參詣を停止なされた事がある、こゝらの御示を能く聽聞せねばならぬ、艸根木皮の醫者が與へた藥でさへ、利目が現れゝば、熱がさめたり、腹痛がやんで病が治る、況や大悲の如來樣が、五刼の思惟で脈を取り、兆載永刼の御修行で、三業淸淨のお誠をこめさせられた、南無阿彌陀佛の御藥が、行者の心へ届かせられたならば、口も姿も變るべき筈の事、依つて御文には『眞實信心を獲得した人は、必口にもいだし、色にも其のすがたは見ゆるなり』と宣ふ。

併これを又一概に聞いて、改めねばならぬ、變へねばならぬと、今迄參らぬ者が參る樣になり、稱へぬ者が念佛稱へる樣になり、朝夕の御給仕禮拜の營も出來、親のいふ事も聞く樣になりた處で、斯ふならねば淨土參りは出來ぬ、是でこそと、ハヤ人の落度に目が附いて、我身獨が淨土へ參る樣な心持になつてはならぬ、依つて一往に聞くなゝと宣ふ、此の惡人凡夫が少ばかり改めたとて、僅ばかり直つたといふた所で、根が罪惡深重、煩惱熾盛の凡夫なれば犯すも犯さぬも皆同罪、造るも造らぬも俱に惡人、行者の所作が微塵ばかりも、往生の力になる樣な事はない、生れたまくの罪業深重の身ながら、其の儘で佛智不思議に助

けられ、淨土參りに違ひはない。

さりながら此の御慈悲が聞分げられ、たゞ助けて貰ふ身になつて見れば、成らぬ戒行こそは持たれまいが、今迄の我儘放逸を改めて、身に叶ふ丈の參下向の足手も運び、朝な夕なの御給仕も成丈はげみ、枕つけても、目がさめても、稱名念佛を相續し、親子兄弟夫婦の中までも唯今迄の氣儘を改めて、心和ぎ身にも勤めてこそは、此の度生死を免れて、淨土へ參る身になつたしるし、依つて御開山も末燈鈔『五十一左』佛を信ぜんと思ふ心深くなりぬるには、誠にこの身をもいとひ、流轉せんをも悲みて、深く誓をも信じ、阿彌陀佛をもこのみまふしなんどする人は、もとも心のまゝにて惡事をもふるまひなんどせしかども今はかやうの心をもすてんと思召しあはせたまはゞこそ世をいとふしるしにも候はめ』と仰られた、こゝをよく〳〵聽聞して、往生は佛智に任せ、命ながらへ居る間は、上盡一形とある からは、報謝相續の營は、唇の動く間足手のはたらく間は、勤めましようと心かけ、王法仁義の嗜も今迄の誤りを改め、日頃の惡心を翻して、善心になりかへれよと宣へば、日々に新に、又日々に新なりとある聖人の誡を守り、今日よりは〳〵と、命かぎりに改めなほす心になりて、御恩報謝の稱名相續せらるゝが、何よりの肝要。

二に別して辯ずるに
三に初に御和讃に依りて辯ずる

只今申述る通、佛心と凡心と一體になるといふは、凡夫のたのむ心と、如來の助けたまふお心とが、出合ふて一體になるではない、行者の惡心を、如來のよき御心とおなじものになされて下さるゝ事、其の同物になるといふは、行者の心が轉じかはる事ちやと、轉變の義を述るに就いて、初に總じて辯ずる一科は、只今の聽聞の通、偖二に別して辯ずるに三、初に御和讃に依つて辯ず、正像末和讃に『彌陀智願の廣海に、凡夫善惡の心水も、歸入しぬればすなはちに、大悲心とぞ轉ずなる』と宣ひた、此の和讃の心を御相承なされて、御文に『行者のわろき心を、如來のよき御心と、おなじものになしたまふなり、このいはれを以て佛心と凡心

と一體になるといへるは、この心なり』と仰られた者と見える、先轉ずるといふは、其の體を失はずに、別物になるが轉ずるなり、去年の手代に暇やつて、別に手代を抱へるのなら、取替るといふ者、今迄の丁稚を手代になほした所を轉ずるといふ、山の芋が鰻になる、雀海中に入つて蛤となる、是等は皆轉ずるといふ者で、今日の我等が此の心を皆捨てく、如來回向の信心ばかりで、淨土へ參るのではない、久遠劫より迷ふて來た、此の心に、南無阿彌陀佛の御回向が届いたれば、我が心が淸淨眞實の淨土參りの信心と轉じ變つて來た、是を宗釋禪師は、『曇丹の一粒は鐵を變じて金とする』と仰られた、石や瓦を海川へ捨てゝ、別に黃金出

すではない、石や瓦に仙人の靈藥、眾丹を塗れば、其の儘黃金となる、我等の邪見驕慢、疑心自力の心に南無阿彌陀佛の眾丹の妙藥を與へて下されたれば、此の惡き心が、能生清淨願往生心と、信心に轉じかへて下さる、即唯今引いた御和讃に、海の十德の中の同一鹹味の德にお喩へなされて、彌陀智願の廣海とは如來の本願を海にお喩へなされ、行者の機を川の水にお喩へなされて、川の水には濁つた水もあり、澄だ水もあり、冷い水もあれば、ぬるき水もあるなれど、其の百川萬河が海に流れこむと、皆同じ潮の味じとなる川の水をわきへおしやりて、海の潮ばかりにするのぢやない、川の水が其の體を失なはず、に、海の潮の味と

なる、今も本願名號の海へ、斯かる者を御助は、彼方ばかりと行者の心が流れこむと、此の心の其の儘ながら、轉じ、變りて往生治定、御助けは一定、ヤレ嬉しやと變る、是を『大悲心とぞ轉ずなる』と御意あらせられた、『其の轉ずなる』のお言が、丁稚が手代になる、雀が蛤になる、山芋が鰻になる、是等も轉じかはる轉變の義なれども、何が轉じ變るといふたとて、必墮無間の惡人女人が、今死ねばどうなるやら、一寸先は闇黑の後生、智者も學者も疑の晴れかねて御座らせらるゝ未來の大事を一文不知の吾人が、今でも死ねば淨土參り、アラ嬉しやと落付かれるのは、大千世界を尋ねても、是程の大變りはない、由つて和讃に『釋迦彌陀の慈悲

よりぞ願作佛心はじめたる、信心の智慧にいりてこそ、佛恩報ずる身ではなれ』と仰られた、後生も知らず、御慈悲をも辨へぬ我身が淨土參りに疑ひはれ、御恩喜ぶ身となりたは、天にも地にもない轉變の大變りぢや、況や頓命が終れば、此の淺間敷い凡夫が、淨土へ往生とげて、三十二相八十種好、十方衆生に珠數かけて拜まるゝ樣な佛になると御意なさるゝ、此を御文に『かならず〳〵極樂へまゐり、てうつくしき佛ではなるべきなり』と仰られた、こゝが此の轉ずるの御意から流出でた御言、是を我身〳〵に引受て見ますれば、乞食が金持になるの、平百姓が庄屋になるの、平僧が飛擔になるの餘間が院家になるのといふ位な

變りではない、夫でさへ莫大な金がいる、況や土民百姓が將軍になるの、天子になるのといふは、夢にも叶はぬ事ぢやに、此の惡人女人が、一文不知の此の儘で、佛になるとは常に聞けば、ありふれた事を聞く樣に思へども、無量劫にも億劫にも、なられぬ事がなるのぢや程に、此の尊さを我身一ツに引受けられてあるならば、誠に不思議の御慈悲にて、斯る有難き身になし下さる事の嬉しさよと、思知られたうへからは、生存へて居る中は、仰で廣大の御恩を思ひ、伏して我身の仕合を喜び、寢ても覺めても命限りに、雨山つもる廣大の御恩德を、行住坐臥に、喜ばれまするが肝要と申す者。

二に御一代記に依りて辯ずる

轉變の義を辯ずるに就いて、別して辯ずる中、初に和讃に依つて辯ずる義は前に申述べた通り、二に御一代記に依つて辯ずるに、兼て申す通、轉ずるといふは、其の體を失はずして、別の物に轉じ變る事で、他力といへばこて凡夫の心を皆拂除けて、如來回向の信心ばかりで、淨土へ參る樣に心得ると、死だ時は、如來回向の信心ばかりが淨土へ參つて、是れ迄迷ふた凡夫の心は、娑婆に捨てられ殘されては、何も難有いことはない、此の凡夫の心が淨土へ參るでこそ、後生を願ふ張合ひもある、然らばこて凡夫の心が淨土へ參る種子になつて其賴む信心が、如來の他力を杖にして往生するのちやと心得れば、又半自力半他力となる、左樣ならば如何心得るがよいぞといへば、夫を御一代記第六十四條『衆生をしつらひたまふ、しつらうといふは、衆生の心をそのまゝをきて、よき心を御加へ候ひて、よくめされなし候衆生の心をみなとりかへて、佛智ばかりにて、別に御したて候ことにてはなく候』と仰られた、此の御言は改邪鈔末十左六『彌陀他力の信をもて凡夫の信とし、彌陀他力の行をもて凡夫の行とし彌陀他力の作業をもて、凡夫報土に往生する正業として、この穢界をすてゝ、かの淨刹に往生せよと、しつらひたまふをもて眞宗とす』とある、此の文に據て仰られた事と見える、此の文に、彌陀他力の信行

を以て凡夫の信行とすといふてそれを次ぎにしつらひたまふ、とある故に、信も行も行者の物は少もない、丸ながらの他力ばかりの處を、しつらふといふた者ぢやと心得て、凡夫の心は淨土へは參られぬ者と、思ふまい者でもない、又蓮師の時分には左樣に心得た者もありたと見る、そこをお諭しなされた今の御言、『しつらふといふは、衆生の心をそのまゝおきて、よき心を御加さふらひて、よくめされなし候』めされなしは、よくめされ、よくなしたまふといふ事。このしつらふといふ言が、源氏箒木卷の雨夜の品定の所に『しつらひまばゆくして』とある、此の雨夜の品定の所ばかりを拔出して、夫に今の世の俗語を以て註したる、藤

原宇萬伎の雨夜物語だみことばといふ書がある、其の書にこのしつらひとは俗につくらふ事なりと註してある、

校補者曰、香月院師講述御一代聞書講義十一三十に雨夜物語民語に云々とあり、こは前に掲ぐるだみことばを民語と寫誤せしなるべし、

和字通例の中には、補理と書いてしつらひと假名が附けてある、僧尼令又は遊仙窟にも料理と書いてしつらふと假名が附けてある、其の下の註に佛閣や廟塔抔に物を塗りたり箔を置いたりして奇麗にする事をしつろふといふことある、今の箒木の卷では、光源氏の御臺所の御里の左大臣家の御殿が、元とは見違へる樣に奇麗になつた事で、

御殿の柱や梁までを取替へて立派になつたではない、外から塗つたり箔を置いたりして結構に奇麗になつた、夫をしつらふといふた者、今凡夫の心が根から結構な難有い心になりたではない、如來回向の南無阿彌陀佛が、行者の心へ届いたに依つて、無量劫にも、はれかねた往生に疑がはれ、御助け一定ヤレ嬉しやと安心なられたは、他力の御はからひよりなさしめたまふ處故、『よき心を御加へ候ひて』等とある、

加ふるといふは加被力の加の字で、如來の加被力を以て凡夫の心を清淨眞實の信心となさしめたまふ、他力の御なしわざの事ぢや、此を譬喩でおきかせなされたが論註

下十六の御釋で『淨摩尼珠之を濁水に置けば即清淨なるが如し』とありて、此のお譬諭でいへば、凡夫の心は穢果てた自力疑心の濁水なり、其の中へ佛智他力の御心を加へたまふは、淨摩尼珠の名玉を濁水の中へ投込んだ如く、其の端的に凡夫無始以來の自力疑心の濁がなくなり、本願を信ずる清淨信になりた、夫を今『衆生の心をそのまゝおきて』と仰られた

校補者曰、醫者の藥局で、聊ばかりの藥品を水に入れゝば、既に水が藥と名が變りて、病を治すが如し。

泥をかき立てた濁水が、清淨な水になる筈はないけれども、淨摩尼珠の玉の德で、清淨な水となる、濁つた水を酌出

して棄てゝ仕舞ふて、別に澄だ水を酌入れるではない、濁つた水の體が直に清淨の水となる、今も夫と同事で、我等が心を取のけて別に信心ばかりで淨土へ參るではない、我れ等が心の濁水に、南無陀彌陀佛の淨摩尼珠が届かせられたればこそ、邪見驕慢、自力疑心の濁りはてた此の心が、あやまりはてゝ願力をたのみ、往生治定ヤレ嬉しやの、清淨眞實の信心となりた、爰を御和讃では『大悲心こそ轉ずなる』このたまひ、御一代記では『よき心を御加へ候ひて』と仰られたなり、今の御文では『行者の悪き心を、如來のよき御心とおなじものになしたまふ』このたまひたが、此の佛心凡心一體のいはれぢやぞと御示しなさるゝ。

實に我身〳〵の安心にかけて見ますれば、一代經を覽て腸にして御座る樣な智者聖人も、はれかねたまふ後生の大事、落付き兼ねた未來の行末、夫をば一文不知の尼嗚々が、往生は一定御助けは治定、唯今死でも極樂參りと、是程な大事に疑ひはれて喜ぶ樣になりたのは、偏に疑蓋無雜の如來大悲の信樂の御誡が、行者の心へ届いて下されればこそ、斯る不思議の信心を決定し、淨土參りを安堵して、喜ぶ樣な身となりた事は、喜んでも、尊みても飽足りのない我身の仕合せと思知れてあるならば、生々世々の御恩を思ひ、今日頂いた仕合を喜び、娑婆逗留の間は、仰いでも伏しても、唯御恩を喜ぶより外はない。

三に三業轉變の義を述べるに初に轉心

第六會

唯今は轉變の義に就いて御一代記に依つて辯じた事ちやが、三に、三業轉變の義を述するに三、初に轉心、他力回向の御誡が行屆いて下されば、行者の心が轉じ變る事を辯ずるが此の一科、夫に就いて一念の塲の轉ずる相と、又相續の塲に就いて、心の轉ずる相を御述べなされる御教化がある。

先一念の塲で心の轉ずる相は、御文一帖目五通『所詮已前は、いかやうの心中にてありといふとも、これよりのちは、心中にこゝろえおかるべき次第をくはしく申すべし、よく〳〵耳をそばだてゝ聽聞あるべし、そのゆゑは、他力の

信心といふ事を、しかと心中にたくはへられ候て、そのうへには、佛恩報謝のためには、行住坐臥に念佛を申さるべきばかりなり、このこゝろにてあるなちば、このたびの往生は一定なり』とありて、今迄は是では參られようか、參られまいかと、後生の大事に落付きかねて、いざ死ぬといふ塲に向ふて見れば、大山に向ふた樣で、黑闇へでもはいる樣な心持ちであつたのが、本願名號のいはれが聞開かれて、久遠劫來の迷の闇がはれ、命終れば淨土參り、ヤレ嬉やと落付いて、昨日まで恐しかつた後生が、嬉い思になる程の大變りはない。こゝを『一念をもては、往生治定の時尅とさだめ』と仰られる、其の一念の歡喜が相續してゆく故

信決定の上には、自日頃の心も轉じ變つて來る、依つて平生相續の心に就いても、變目があるぞと仰らるゝ御言が屢々ある、御一代記第百七條『何ともして、人になをされ候やうに、心中を持つべし、わが心中をば、同行の中へうちいておくべし、下こしたる人のいふことをば、必用ゐざれば腹立するなり、あさましきことなり、たゞ人になをさるゝやうに心中を持べき儀に候』是は信の上の相續に就いて、心の持様をお聞かせなされた御意なり、人をなほそうと思うな、我身が人になほさるゝ様に心を持つべし、其の人に直さるゝといふに就いても、上たる人のいふ事は、聞かれる者、用ゐられる者なれども、目下の人のいふ事は、假令よい事

ちやと、腹では思ぶて居ても、貪惜で用ゐ難い者、用ゐぬばかりならまだしもよけれども、却て腹を立つ人がある、主人や兩親のいふ事は、よく聞きもし用ゐもずれども、家來や妻子のいふ事は、是は自分の方が悪いと思ひながらも彼等にいはれて、悪かつた抔とあやまつてはすまぬなどゝ、痩我慢を起して、却て腹を立てゝ呵附ける様になる、依つて、今下たる人のいふ事を、よく聞けと仰られる。總じて上から下へ向ふては、異見の仕よい者ぢやが、下から上へ向ふて諫言するといふ事は、甚いひにくひ者で、悪いがと思ふても、大抵な事はいはずに仕舞、然るに家來が主人に向ひ、子が親に向ひ、妻が夫に對して、此は悪ふ御座る、宜し

くありますまい抔といふは、餘程の事でなければいへぬ者じや、よつて上たる人のいふ事よりは、下たる者のいふ事は、よく氣を附けて聞けよとのたまふ、又第百三十八條『くちごはたらきとは似するものなり、心ねがよくなりがたきものなり、涯分、心の方を嗜み申すべきことなり云云』と仰られた、是等は皆相續に就いて心の變目、轉ずる相を示させられた者、依つて一念の塲の轉じ變る相を、御文や御一代記から懇に仰られた事ちの轉じ變る相と、相續にかけて、心やが、つゞまる所、今息が切れゝば、地獄へ墮ちる此の身が、淨土參りに相違ないと、安堵のならるゝ程の大變りはない、その聞得る一念に、地獄へ墮ちる我身が、危い處を呼掛

けられ、浮雲おい所を抱き止て貰ふて、無量永刼の命拾ひを致しまたしと、一と息さきの浮雲なさを聞分けられた今の思ひからは、其の嬉れしさの餘には、心に變目がなくてはならぬ『信を得たらは、同行にあらく物も申まじきなり、心和らぐべきなり、觸光柔輭の願あり』とのたまひたれば、自相續の塲にも理に負けて、我情を捨てるは佛の御慈悲なりとのたまひて、親は子に負け、子は親に負け、兄弟夫婦の中までも、互に心和いで、此の世が送られる樣になるなり。

然るに御文には、『更になにへんともなき體なるあひだ、當年より諸人の出入をこぐむる』とも、又『年々を經といへど

も、同篇たるべきやうに見えたり』とも御なげきあらせられた、今こゝに貧乏で仕方のない者が、金の千兩も貰ふたら、頭の一ツや二ツ打たれた迚て笑ふて居るであらうのに、今湯玉の中へ沈む者が、百千萬刧の初事に、千萬兩にも替へ難い寶をば、信の一念に頂いて、淨土へ參る身となつて見たならば、假令人が、何程無理いふても、不請もなれば堪忍も出來る筈、こゝの處をどうぞ忘れぬ樣、爰さへ常に思出せば、娑婆の事は不請がなる。依つて法然聖人は『喜ばしき哉わが心、無爲の都にかへりゆきて、四聖の生となん事を』と、是等も信の上の相續の心の嬉しさ、善ばしさを御述べなされた御意ちや程に、いよ〳〵一念の立處に、地獄を免れて淨土參りと心が轉じ變つたならば、夫より後は五年なり十年なり、極樂淨土へ參るまでは心を和げ腰をひくゝ、人には負けて我を張らず、念佛相續怠らぬ樣、命を限り、根かぎりに嗜まるゝが、何より以て念佛行者の心得と申す者。

第七　會

三業轉變の義に就いて、別して示す三の中、初の轉心の事は、前席に申述がた通、二に轉口とは、信心を得て心が和いで見れば、語も自變らねばならぬ、御一代記二百九十三條に『信を得たらば、同行にあらく物も申すまじさなり、心和ぐべきなり、觸光柔輭の願あり、又信なければ我になりて詞もあら

二に轉口

く、諍もかならず出來するなり、あさまじ〳〵よく〳〵心得べしと云々』と仰せられてある、口でいふ事位はと、輕々しく思ふて惡口すれども、口業の罪も却々畏しき者で、佛像經の中に、佛世尊が或時阿難尊者を連れて通りたまふに、路傍に一ツの糞桶があつた、其の中に大な蟲が居る、其の蟲が口もなく鼻や目から泡を吐いて苦んで居る、其の時世尊が阿難に示させられて宣く、此の蟲は過去狗留孫佛の時に、或婆羅門が大勢の佛弟子を供養して、日々齋を施して夫を世話する知事の僧が、施主より施した、醬油や蜜や結搆なお菜を隠して置いて、我身一人が折々取出して食して、一向外の僧へ與へなんだ、夫を外の僧が知つて、

之を誡めていふには、施主の供養物は、大衆一同に平等に施すへき物なるを、其許は一人して貯へて置いてたべるといふ事は、あらう事ではないと申したれば、其の時彼の知事の僧大に瞋り、自分が何を隠して置うぞ、すべて食事の世話は自分の役前ちや、其許等が彼此世話を燒〳〵に及ばぬ、夫程うまい物が喰い度なら、糞でも喰へと、タツタ一ト言いふた、此の惡口の報で、此の如く糞中の蟲となつて、多生を經るぞとお說きなされ、又同經に、母が子供に菓の番をさせた處が、其子が母の許しを受けずに、一ツ菓を喰ふた、夫を母が知つて腹を立て、大に呵りたれば其子も亦腹を立て、これ式の物一ツや二ツ喰ふたとて、其樣に呵る事

はない、畜生でさへ子を憐むのに、我母は畜生にも劣つて居ると、親を畜生といふた報で九十一却が間鹿に生れたぞとお説きなされてある。我々も折にふれては、餓鬼の、畜生の、糞を喰らへ、のといふやうな事は申しますが實に恐入りた事で、信心決定の人は、大につゝしむべき事なり。然るに、此の三業の悪に就いて、佛法と世法で大いに違い目がある、先世間の法では、心の悪よりは口が重く、口の悪よりは身業の悪が重い、假令心に思ふても、口へ出していはねば、人は何んとも思はぬ、口で打殺すぞの、屋敷を黒土にしてやるぞのといふても、お上の御手にかゝつて放火殺人の刑罰には處せられぬ、然るに佛法の上では、體の悪よ

りは、口の悪を重しとする事がある、五逆は身業の悪の至極なれども、口業で造る謗法の悪よりは輕い、口業の誹謗正法の罪は重けれども、心の無信闡提は猶重いと説きたまふ、一切の悪は皆心より生ずる、然るに當流に於ては、此の三業の悪をたしなめよと仰らるゝ事は、源、大無量壽經の悲化段からが、世間の法度、人道を守れと仰られて、末來の大事に就いては、身口意の三業に目をかけず、至心信樂己を忘れて口の悪も、身の罪も、意で巧んだ罪業も、十悪五逆に目をつけず、不思議の佛智を賴む一念に、業も報も皆如來様がお受取り下されば、御助の一念は我身の罪の深きに目をかけず、ひたすら如來の願力を信ずるより外は

ない、こゝを御一代記には『罪の沙汰無益なり』と宣まひ、此の願力の不思議がたのまれ、始末のならぬ悪業煩悩を、如來様に打任せて助けて貰ふた上からは、娑婆にながらへ居る間は、此御恩報謝をいとなむ身は、可成丈は、悪き事はたしなめよと宣ふ、依つて世間世法の道を守るが信後のたしなみなれば、假令心の内には、嫉や腹立ちやと思ふ心は起らうとも、せめて口へ出していふたり、相に顯はして働かぬ様、大經に言色常和と御説きなされてあるからは、言はことば、色は顔色で口業、身業、假令夫婦の仲でも胸まで一杯になりても、口に出て往け、出て往くワと、舌から出たらモウあとへは歸らぬ、何程嫉ふて打殺したい様に

思ふても、手を出して打叩くと、モウ取返しはならぬ、そこを口にたしなみ、身にたしなめば、又親子兄弟夫婦の交りが出來る、こゝを『信を得たらば、同行にあらく物も申すまじきなり』と仰られた、然るに先信の上は口業の念佛申すが第一なり、念佛申さぬから、いふまじき事をいふたり、嘘僞もいふ様になる、依つて今『信を得たらば』と宣ふ。

次に『信なければ、我になりて詞もあらく、諍も出るぞ』と仰られた、口に念佛を稱へられぬのは、心に一念の御助が信ぜられぬからの事、信ぜられねば淨土の往生は叶ぬ、依て今の御言に『信を得たらば、信なければ』と、水際を立てゝ御聞せなされた、此の信の一字千金よりも重しと知るべし、

故に御文には『眞實の信心を獲得したらん人は、必口にもいだし、又色にもそのすがたは見ゆるなり』と仰られた、信を得れば口も今迄よりはたしなまねばならず、身もつゝしまねばならぬが、淨土を願ふ信決定の身の上、夫をば更になに、へんともないと、お歎きあそばす。病人などを見舞に往いて此の間は如何で御座ると尋ねた時、同篇で御座るといふのは、夫は治らぬ病人ぢや、治らねば死ぬより外はない、『年々を經といへども同篇たるべき樣に見えたり』、年を重ねて聽聞しても、元の通のありさまで、變目がなければ、地獄へ行くより外はない程に、爰をよく〳〵心得られて、一念に淨土參と心を翻へし、淨土往生といふ身になられた上からは、口も姿も命かぎり、たしなみましようと、心がけらるゝが何よりの事。

第八會

唯今申す通、生死の迷を離れて淨土へ參るといふ、大變りに落付て見れば、口きく事も自和かになる、偖て三に轉身とは、姿形に現はるゝ行も自變らねばならぬ、依つて御一代記第二百十九條『信のうへには、さのみ惡き事は有まじく候、或は人の云候などゝて、あしき事などはあるまじく候、今度生死の結句をきりて、安樂に生ぜんと思はん人、いかんとしてあしきさまなる事をすべきやと仰られ候』是は身業の振舞に就いての御誡、當善知識樣(達如上人なり)の七ケ條

三に轉身

にも『念佛行者に不似合の振舞これなき樣』と仰られたがこゝの事なり。時に『信の上には、さのみわるき事はあるまじく候』とある、此わろきことは文字で書けば惡事と書く、今日の我等、設御聽聞の上からも、するとこなす事皆惡事、夫を信の上に惡事はないと仰らるゝからは、私が樣な者は迚ても淨土參は叶はぬかと、斯樣に思ふまい者でもないが是は一切の惡事が皆轉じて善事になる事ではない、依つて此の御言に『さのみわろき事』と仰せられた、さのみとは左程といふ事で、此の凡夫が一切の惡を轉じて善人にはなれまいけれども、信の上には左程わるき事にはならぬぞと仰せらるゝ御意ぢや、然るに左程と聞いては、どれほ

ど迄の惡を嗜み、いか程迄の善を積むかといふに、都て善惡の事は、諸宗それ〳〵の習がありて、或は迷の中で善惡を立つれば、地獄、餓鬼、畜生の業を惡とし、修羅、人間、天上の業を善とする、此時は三毒十惡が惡となりて、五戒十善が善となる、又迷ひと悟りとを對すれば、聲聞、緣覺、菩薩、佛、の四聖を善とし、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上、の六凡を惡とする。是は性相家の意、又天台などの一乘家では、地獄より菩薩までの九界を皆惡とし、佛界のみを善と立てる、善惡の事は宗旨〳〵の習がある。當流に於ては、源、大經の悲化段に、五善五惡を說せられたが、淨土眞宗の善惡の掟なり依つて暫、善惡のたしなむべきと、守るべきことを聽聞して

見まするに、五の差別がある。一には佛法の善惡には拘らず、王法の惡を戒め、世間の善を守れと仰らるゝ當流の御教化、佛法の上から善惡因果の道理を以て申す時は、今日の我等一人として極樂參のなるべき者はない、然るに彌陀の本願を信ずるには、善もほしからず、惡も恐るべからず、我が作す善も用に立たず、惡業煩惱は何程あらうとも、彌陀が引受けてくれる、我が善惡に目をかけず、佛智にまかせまゐらすよりは外はない、この御慈悲に助られて、淨土へ參るべき身となりた上からは、菩薩や聲聞ではない、依つてあなた方の御勤なさるゝ戒や行は持てまいが、犬や猫ではあるまい、苟にも萬物の靈長たる人間なれば世

間法に定めおかるゝ人間の道は守れよと教へたまふ、當流の御教化、二に已造の惡を許して、未造の惡を誡めたまふ、世間王法の道では、親に孝行し主人に忠義を盡し、兄弟夫婦の道を正く守るが世間の王法なれども、後生も御慈悲も知らぬ今までは、親に向つて不孝を働き、兄弟夫婦の中でも、道にはづれた不實の振舞のありたは仕方がないが聽聞した今からは、命を限り守れよと、未造らぬ惡を誡めたまふ、三には不故思の惡をゆるして、故思の惡を誡めたまふ、假令信の上にも、知らずに造る惡は力及ばず、人のいふた事を聞いて、誠じやと思ふて噺したのが、嘘であつた事もある、鍬鎌の尖で思はず知らず物の命を取たり、道

をあるいて居る中に、踏うども思はぬに、蟲を踏弑したりする事がある、夫を不故思の業といふ、此等は仕方もなけれども、嘘ちやと知りながら人を欺き、殺さいでもよい物の命を取たりする、是が故思の悪といふ者、知らずになす悪は、是非もなし、あとで氣がついたらあやまりはてゝ、再せぬ樣に心掛けるより外はないが、是は悪い事ぢや、すまじき事ぢやと知りながら、まゝよと思ふて悪事をするのは、命を限り、たしなめよとの當流の御教化、四には、意業の悪を許して、身口の悪を誡めたまふ、我が心のわろきをも、妄念妄執の起るをも、煩惱具足の身なれば力及ばず、設心に欲いと思ふても、手を出して人の物は取るまいと嗜め、

心に悪と思ふても、口へ出して人を罵るな、心の妄念は力及ばぬが、せめては口と姿だけなりとも守れよとあるが、當流信の上の御教化、五には決定業を許して、故起業の悪を誡めたまふ、設念佛の行者でも、過去から定る決定業は免れる事はならぬ、故起業といふて今生で別段に起して造る悪業嗜まふと思へば、嗜まれる悪は造るなよとある御教化。

此の決定業、故起業の事は、行業果報不可思議と御經にお說きなされて、何が決定業やら、何が故起業で、今生で殊更に造る悪ちやゝら、迷の凡夫には、わからねども、今暫わかる所丈を申さば、在家に生れて公儀の公事公役を勤め、親

に仕へ妻子をはぐくみ、家業渡世をはたらくはいふに及ばず、山家に生れては、猪、猿も狩り、濱邊に生れては、網や釣針で魚類の命を取つてくらすのは、是皆前世に定る業なれども、己が榮耀やなぐさみに魚釣つたり、鳥捕つたり、猪猿打つたりするのは、定る業とはいはれぬ、己が邪見でなす故起業とほかいはれぬ、尤別業の所感といふ者がありて、如何なる過去の業が報ふて來て殺すまじき者をも殺し、爲すまじき事をも爲すまい者でもない、そこは凡夫にはわからぬ故、人の身の上の悪を咎めず、信者の身の上にも、悪き振舞があるならば、あの樣なたふとい方でも、過去の業とはいひながら、あんな事もある者をと、いよ〳〵

三世因果の道理を信じ、又我身の上に引受ては、此も過去の業、彼も前世の約束と因果ごかしに許さぬ樣、命を限り嗜む思になり、悪い事のあるに就ては、いよ〳〵慚愧の思を起し、お耻しやと改めねばならぬ、依つて蓮如樣は勤め改め嗜んだ上にあるのが、時節到來宿業ぢやと宣ふ、此も業ぢや彼も約束ぢやと、我が氣任せにはせられぬ程に、我身は迷を離れて淨土參、今度は生死の結句を切り、安樂世界に生ずる者、如何こして悪き事のなるべきやと我儘氣隨を働かぬ樣、既にお改悔では命を限り嗜みましようと、佛祖の御前で申上た、其の言を反古にせぬ樣、此の世に命のあらん限りは、御冥見に恐入り、心一杯嗜まるゝが、信決

定の身の上の日暮と申す者なり

校補者曰、近來世の貴族紳士といはるゝ人、好んで銃獵をせらるゝ事なるが、此等の人は特に此の故起業の下を熟讀せられて、猛省一番せられ度事なり。

二に二種の一體を辨ずるに三初に機法一體を示す

第九會

佛凡一體の義を示すに就いて、二に二種の一體を辯するに三、初に機法一體を示す、機法一體と佛心凡心一體の相を心得ねばならぬに就いて、先初に機法一體を辯ずる、機法一體の名目は、本、西山で申傳へた名目で、當流で此の名目を御依用なされた始は、覺如樣なり、勿論南無言持鈔といふが、現行してあり、これを祖師の御筆としてある、其の

中に機法一體の言が出てはあれども、是は眞僞未決の書で、此の方の御假名聖教にも、隣山の眞宗法要にも載せてない故、依用し難し、覺如樣では願々鈔三左『信心歡喜乃至一念の機を攝益したまふ、その機は又遍照の光明にはぐゝまれて、信心歡喜すれば機法一體になりて、能照所照ふたつなるに似たれども、またく不二なるべし』此が機法一體の御言の始ちや。夫故御一代記に一ケ處、御文には四ケ處まで、機法一體の名目を御出しなされてある、是、南無阿彌陀佛の六字のいはれを、愚な者に聞かせるに甚だわかり易い名目なれば、借用ひて仰られた者と見える、併ながら言は同じ機法一體なれども、御意は天地の相違がある、先

西山では、機法一體といふは、生佛不二の異名と致す、西山法語といふがあつて、内題に西山善慧上人御法語と註してある、其の中に『迷の我等がために、彌陀の正覺を成就する時、迷悟が一になる處を南無阿彌陀佛の六字の名號と申すなり、然れば南無は迷の衆生の體なり、正覺は阿彌陀佛の体なり此の二ツ一ツになりた、處を佛に就いては正覺といひ、凡夫に就げば往生といふ、このいはれを心得知るを、卽便往生ともいひ、機法一體ともいふ』と申してあり、此の意は一切衆生の性得の迷の機を、南無の二字に成就なされ、阿彌陀佛の光壽無量の證の德を、阿彌陀佛の四字に成就する故に、機法一體といふ心なり、故に迷悟一體、生

佛不二の異名となるなり、竹林鈔は顯慧の作、其の第十二章目に、『六字の名號其の体何物ぞ』と問ふて、答に『機法一體、生佛不二の道理を以て其の體とするなり、其の故は南無は歸命なれば、衆生なり、機なり、無量壽を阿彌陀佛と名くるは法なり、然に衆生の機、佛の法に歸するを南無といふなり、諸佛の法を證るを阿彌陀佛と名くる故に、機法一體にして生佛不二なり』と、斯樣に談じて、十刼正覺の時、彌陀と衆生が一體になりて、仕舞たと談する、夫を知らずに今日まで我等衆生は迷ふて居つた、今たのむのが歸する處で、助かるといふではない、助かつて居つた十刼正覺へ立返るのちやと申して、歸命の歸の字を歸還の義にして、今

信を取るの領解するのといふ、能機の信を拂切つて仕舞が竹林鈔、世の人多く名號を深く思ふて領解するを所詮とする、是大なる誤なりと申してある、唯今領解する能信を嫌ふて、正覺の一念に立戻るといふ、是が當流へ流込んで、十劫だのみの異安心となつたのぢや、是の様な六ケ數げな事を、煩しくいふまでもない事なれども、外の誤を心得ておかねば、當流の正義がわかりかねるからの事ぢや。

校補者曰、今世に行はるゝ時宗(本山は相州藤澤山清淨光寺なり)の開祖一遍上人も西山上人の流を酌まれた人故、其の宗の安心も大略之に類せるにやと思はる。

當流では南無の二字に衆生のたのむ機を成就し、阿彌陀

佛の四字に御助の法を十劫の昔に成就したまふ、御成就はなされても、衆生と彌陀、迷と悟とは別々で一ツにはならぬ、故に今日まで如來の御胸をいためて流轉の凡夫と迷ふて來た、然るに今宿善開發して賴む者を助けるとある、機法一體の南無阿彌陀佛が聞其名號と聞分けられて、かゝる者を御助は、彼方ばかりと思ひとる一念の領解が出來るなり、機法一體の六字が機法一體のまくで行者の心に顯れたのが一念の信心この信心を得ねば、此の度の往生は出來ぬ、故に信心をこれ〳〵とのたまふ。

喩を以て申さば、今人が知らぬ旅路へ出掛けて、日が暮れて宿を乞ふ時、私を宿泊て下されといふ、家屋の主人が隨

分お泊申そうが旅籠が二百文いります。二百や三百の錢は何でもない事ぢや、私が親は千兩萬兩の大分限ぢや、其の金持の身上を私に讓るのぢや、私は其の大分限の跡取り息子ぢやと、斯樣に申してりきんで見ても、親から受取つて我が懷にある金でなければ、旅で宿取る間には合はぬ。十劫の昔に我等がために成就なされた六字に違はなけれども、其の名號を行者の心へ信じ受取つて、我が心に しかと、領解したのでなければ、臨終の日暮に向つて、後生の宿取る間には合はぬ、依つて阿彌陀如來樣は、我國に生れんと欲へとのたまひ、釋迦如來樣は、彼國へ生れんと願へと仰られる、觀無量壽經には、『汝好く是の語を持て』とのたまひ阿彌陀經はに『名號を執持せよ』と仰られ法然聖人は『信は一念に生ると取りて』と仰られ、御開山樣は和讃に『本願名號信受して』と御意なされ、御文には『この心ひとつをたもちて、他力の信心をしかとたくはへよ』『たのむ一念の信心を決定せよ』と仰られるは、爰の事ぢや程に、いよいよ爰を明に聽聞して一念の信心を取りて、今度の淨土參を遂られやうが何より肝要。

二に佛心凡心一體を示す

第十會

唯今聽聞の通、機法一體の義は申述べ了る、二に佛心凡心一體を示さば、此の佛心凡心一體と云ふ名目も、鎮西淨土宗で盛んに申す事て、當流では眞要鈔に、如來の御心と一

ツになると仰せらるゝ、御言がある、御文では、二帖目の第九通に『佛心と凡心とひとつになる處をさして、信心獲得の行者とはいふなり』と仰られてある。是も御言は一ツなれども、お心は大に違ふ、鎮西で申す佛心凡心一體は、行者のたのむ心と、如來の助けたまふ法の誠とが、出合ふた處で一體となる、啐喙同時と申して鷄が卵をだいてかやすに、親鷄のぬくもりで卵の中で兒鷄が孵化る、いよ〳〵鷄の形が備はるなり、兒鷄は出たいと嘴を出す、親鷄は出したいと嘴で殼をつゝく、其の嘴と嘴とが、出逢ふた所で卵が、破れて兒鷄が出る、今も行者は助けたまへと賴む心を起す、如來は助けたいと思召す、行者の賴む心と如來の大

悲のお誠とが出合ふた所で往生が定ると立てるなり。當流の御意は、そうではない、彼方の方で賴む機も助けたまふ法も、南無阿彌陀佛の中に成就して、其の六字を御回向なされる、其の名號の我が心へ届いた時、賴む機も助けたまふ法も、丸々如來の他力回向の御誠で現れる、是をお知らせなされたが、唯今の御文の御教化に、『行者のわろき心を如來のよき御心と同じ者になしたまふ』と仰られた。行者のたのむ機を以て、助けたまふ法に向ふ鎮西流の心では、臨終まで往生に安堵はならぬ、法の誠を受取る一ツの他力廻向の信なれば、聞得る一念に、はや往生の安堵が出來る、鎮西抔では、こゝに疑心自力の隔がある、故に臨終

に來迎を拜むまでは、往生に安堵は出來ぬ道理、依つて鎭西は當得往生と立てゝ、實は臨終の夕來迎を拜む迄は安堵は出來ぬ、是が疑心自力で向ふて居る故に、法のお誠が受取れぬ。

これを喩て申さば、世間に富籤に張込む樣な者で、向の當る札は一枚なれども此の方から何十何番が出るであらうときめて、當てずはおくまいと、此の方の札を持つて向ふの當り札に當る氣で向ふ故、五枚よりは十枚、十枚よりは二十枚と、たんと張込んだら、よもや當らうと此の方から持つて向へども、向の上り札を見ぬ內は安堵はならぬ自力念佛の行者がそれで、助けたまふ目當は向にあるに

違はない、夫は少も疑はねども、我が心を以て向の御慈悲に契當して、當たる心で居る者故に、千遍よりは萬遍、萬遍よりは三萬遍とたんと稱へさへしたらば、よもや間違はあるまいと、口稱の行を賴みて向へども、心の底は臨終に來迎を拜ぬ內は、往生が出來るやら出來ぬやらと、しかと安堵が出來ぬ。今當流の他力回向の心で申さば、向から何十何番の札が上つた程に、是に附けよと上り札を見せられて、其の札に張込むのなれば、張込む心までが、向からいたゞいたのちや、依て其の札に張込む時から、はや安堵が出來る、今も夫と同じ事で彼方のかたで賴むばかりて必助ける、若問違ふたら彌陀は正覺は取らぬぞと、正覺成就

の札を彼方の方から見せて下され、聞せて下され、先手をかけさせられた南無阿彌陀佛、其の名號を聞分て見れば、こう賴んだから助からうか、こう思ふたから參らりようか、是程稱へたら生れらりよかと、此方からあてがうのではない、助ける證據は彼方から出して見せて下された南無阿彌陀佛、其の名號のいはれを聞いて、斯かるものを御助けは、彼方ばかりと賴む心が、此方から起こした心ではない、如來の御誠が行者の方へ届いた一念なれば、聞き得る一念賴む心の落ち着いたときが、はや往生治定ヤレ嬉しやと、淨土參の千兩富を付け當てた處故に、『南無阿彌陀佛と聞かば、あはは、や我が往生は成就しにけりと思ふべ

し、衆生往生せずは、正覺ならじと誓ひたまひし、法藏菩薩の正覺の果名なるが故に』、何十何番の闘が出た、これに付けよといはるゝのに、疑ふて居樣道理はない、是程たしかな事はない、賴むばかりで助けるとある南無阿彌陀佛の證據を出して、呼掛けて下さるゝ淨土參、夫をば我が疑心自力に隔てられて、これであれでと今日まで、あてがいぶりでをりましたが、此の私が助らう事の嬉しやと落着いたは、今の一念助けるに違いないその御受合びは、十刧正覺の昔から盡十方無导光と、明に輝いて下さるゝ如來の御慈悲、日輪は天に輝けども盲人は見ず、雷霆は空に轟けども聾者は聞かず、今日までかゝる御呼聲を聞付けずに

居りましたは、所謂莊子が『豈耳目の盲聾のみならんや、心も亦これあり』といはれた如く、今迄無明に目を掩はれ、業障に耳を塞がれて、かゝる明な御慈悲を信じ兼て居りましたが、此の度はよく〳〵手強い御慈悲から、此の南無阿彌陀佛の御呼聲が聞付けられ、助けてくりようの御慈悲であつた者をと、一念領解がなられるなり、臨終まで待つに及はず、平生業成と此の座から直に未來の安堵が出來、五年十年生存樣とも、命の終るを往生の期と待受けて、喜び〳〵此の世を送る仕合は、他力信心を得た身の上に限る事。

第十一會

三種の異同を辯ずるに就いて、三に一體と二體とを辯ずるに初めに正示す

機法一體と佛凡一體の二種の一體を辯ずるに就いて、三に二種一體の異同を辯ず。機法一體と佛心凡心一體の變目と又同體なる事とを示すべし。夫に就いて三あり、初に正く示す。此の二種一體の義は、上來申す通、西山流では、佛心凡心一體までを、皆十劫正覺の一念に引上げて、十劫正覺の時、佛と衆生と一體になりたといふ所で、生佛不二を談ずる。又鎭西流では、機法一體も佛心凡心一體も、行者歸命の至誠心から、佛の誠と一體になると、皆行者の機の上に於て沙汰を致す。又當流では、機法一體の名號は、十劫の昔に成就してあつて、行者がたのみも信じもせぬ先から、彼方の方て、たのむばかりで助けると、南無阿彌陀佛の六

字に成就してある。依つて御文には、機法一體の名目は四ケ所まで仰られたれども、皆行體に就いて御釋なさるゝ八ケ條の御文に『南無と歸命する機と、阿彌陀佛の助けまします法とが一體になるところをさして機法一體の南無阿彌陀佛とは申すなり』此の此言に氣を付て拜見して見ますれば、南無と歸命する機に、阿彌陀佛の助けまします法とが一體になると、歸命の一念の處で一體になるなれば、にの字を入れさせられねばならぬ、夫を歸命する、機と、助けまします法とか、一體に成る所をさして、機法一體の南無阿彌陀佛と申すなりと、法の行體の上で機法一體を御述べなさるゝ。四帖目第十一通にも『たのむ機を阿彌

陀佛の助けたまふ法なるが故に、これを機法一體の南無阿彌陀佛といへるはこのこゝろなり』と、行體に就いて、いつも仰られる、又佛心凡心一體の御釋は、行者の機に受取つた、信決定の場で御述べなされる。唯今の御文でも『十惡五逆の罪人も、五障三從の女人までも、みな助け給へる不思議の誓願力ぞと深く信じて、さらに一念も本願を疑ふ心なければ、かたじけなくも其の心を如來のよくしろめして、すでに行者のわろき心を如來のよき御心とおなじものになしたまふなり』又の御意には『佛心と凡心と一體になるところをさして信心獲得の行者とは申すなり』と宣ひ、行者が信じ受たところでなければ、佛心凡心一體と

は仰られぬ。眞要鈔本二十右『そのことはりをきゝて一念解了の心おこれば、佛心と凡心とまたくひとつになるなり』と宣ひ、又御一代聞書第百六十一條『彌陀をたのめば、如來の佛心と一つになし給ふが故に一心といふなり』と仰られてある、然れば機法一體は、十劫正覺の名號に成就し、佛心凡心一體は、行者歸命の一念の處をさして仰らるゝ。爰が二種一體の變目の處、然らば二種一體は、長く別ぢやかといふに、機法一體の南無阿彌陀佛が、行者の心へ届いた一念が、機法一體の信となる、然らば機法一體も佛心凡心一體も行者の能信の處でいへば全同じ事で、すべて信行不離も所信能信も、機法一體も佛心凡心一體も、名は異れども、極まる所は一ツ事。依つて存覺上人の、六要鈔の御指南に、信行能所機法一なりと仰られて、法も南無阿彌陀佛、機も南無阿彌陀佛、信も南無阿彌陀佛、行も南阿阿彌陀佛、故に祖師聖人御一代の御言に、機法一體の名目は仰られた事はないけれども、覺如上人か、始て願々鈔に機法一體の名目を仰られ、蓮如上人は、御文に四ケ處まで御出しなされ、夫を行者の機に受けた處では佛心凡心一體になると仰らるゝのが、私に御述べなさるゝではない、名目は御示しなされねども、其の源は廣文類。義は御開山樣の御本書を御相承なされた、其の譯は行卷に諸佛稱名之願と標して、淨土眞實の行、選擇本願の行と、行の下へ行を御擧げなされて

ある。然るに信巻に十八願を至心信樂之願と標させられたからは、其の下には、往相廻向の信と、信が擧げさせられてあるべきに、さはなくて正定聚の機と、機を擧げさせたまふ、是は所信の行は南無阿彌陀佛、夫を受けた信心は、行者の機に顯れた處故、疑晴れた機と、南無阿彌陀佛の行とが相離れず、名號の法を信ずる機と、行者のたのむ機と、助けたまふ法とが、一體ちやといふ事を顯はさせられた廣文類の御釋故に、たのんだ處で機法一體に始てなるではない、本願成就の南無阿彌陀佛に、機法一體を成就なされた御廻向が、行者の心へ信じ受けられた處で、機法一體が其の儘行者の心へ顯れた處が、行者の信心が機法一體の

信心、そこが佛心と凡心と一體になりた處ちやぞと御意遊ばず、唯今の御文の御指南。爰が是紛れ易い處で、凡夫の心が如來の御心と一體に成るといへば、賴む心を以て向ふて、助ける御悲悲に相契ふて、一體に成る樣に心得る、左樣ではない、たのむ心がはや十劫正覺の時御成就の、南無阿彌陀佛が行者へ顯れた信故に、是を『行者の惡き心を如來のよき御心と、同じものになしたまふ』と仰らるゝ。御開山樣はこれを『大悲心こそ轉ずなる』と宣ひたがこゝの事也。こゝをよく〳〵聽聞申さねばならぬ、よく思ふて見られよ、人間と畜生とは、果報は唯一段の違ひなれども、人間の心を犬や猫に呑込まそう

とした事で、なか〳〵容易に呑込まさるゝ者ではない、永年畜い置いた犬猫でも、己が一生に一度の大事ぢや程に、斯〳〵してくれといふたとて、犬や猫が夫を呑込む者ではない。同じ天地の間に住んで、僅に一段の果報の違でさへ、人間の心を犬や猫が受取る事は出來ぬ、然るに五十二段も段の違ふた如來の御心が、此の愚痴無智の凡夫の心へ、御届きなされたが一念の信心故に、之を一念無上の佛智と仰られる。落付いた我々は、今生が始て、斯る者を御助けは彼方ばかりと、信じて見れば、造作もなき事に思へども、落付かせて下された、如來の御慈悲は、一世や二世の事ではない、『信樂を獲得することは、如來選擇の願心より發起す』とも、『智慧の念佛うることは、法藏願力のなせるなり』とも『信は願より生すれば』とも仰られて、迷の凡夫はどれ程の御慈悲であつたやら、生々世々の御恩はわからぬがやがて淨土へ參りて見ると、生々世々の御恩の程が、皆明に知れて、斯る御恩をいたゞきながら、僅ばかりの御報謝を、難義苦勞に思ふた事の勿體なやと、淨土の蓮臺に眼を開いた時、婆娑に居た時の大樣懈怠が、花の臺て悔しうなると御意遊ばす。爰の所が明に聞開かれてあるならば、生々世々の御恩の程、今日値遇の身の仕合、やがて淨土へ參らう事の嬉しさよと、後をながめても先を思ふても、唯廣大の御恩、此の世にながらへおる間は、寢ても寤めても、火

水の中までも懈怠せまいと心掛けらるゝのが、肝要なり。

第十一會

唯今聽聞の通、機法一體と佛心凡心一體とは、異りてありながら、又同じ事、夫を正しく示す科は辯じ了る、二に喩を擧ぐ、これが入組んだ事で、愚な尼嚊々の心へは届き兼ねる、依つて喩を以て申さば、放蕩な息子が旅に居る、然るに親が其の家も身上も、あの子にくれたいと思ふて、是迄にしたが、どうぞ呼寄せて跡式が讓りたいと、一通の手紙を認める、其の手紙に折角是迄身上を拵へたも、其方に讓りたいばかりぢや程に、どうぞ内へ來て跡式を相續してくれよ、夫に就いては、旅の事ぢやに依つて、何事も仕度は出

來まい、綴衣着たまくで來い、又不埒の借金があらば、夫も皆親が引受てくれる、何もいらぬ程に唯戻れと、書た手紙が機法一體といふ者ぢや、其の子は不孝の有丈け盡したれば、迚も戻るといふ機が起らぬ、假令戻りたいといふ機が起つたとて、我が機で親の跡が取れる者てはない、然るを親の方から、戻る機になれ、跡式讓ると、其の子が戻らうの機も、親の與へる身上の法も、皆一通の手紙の中に成就してある。斯樣に手紙は機法一體に出來たれ共、其子の手許へ手紙が届かぬ間は、親の心と子の心とが一つにならぬ。然るに慥な人を以て其の子の居處をさがして、親の手紙を渡した、され共其の手紙を受取つて封切つて、中のい

はれを讀まぬ間は、まだ親の心と子の心が一つにならぬ。そこで封切つて中のいはれを讀んで見たれば、親の誠の有丈け、是迄の借金は引受けてくれる、綴衣のまゝで大事ない、戻る機になるばかりで、跡式讓るといふ親の誠、其の眞實が聞分けられて、大千界に親なればこそ、私が樣な者を斯くまでに憐んで下さるゝ事の勿體なや、戻りませうの思に成つた處が、親の心と子の心と一ツに成つた塲ぢや、其の戻りましようの機はどこから出た、親の眞實の籠つた手紙が、子の手許へ届いたりやこそ、戻りませうの機も起つたぢやて、戻る機も子の心から起つたではない、爰が親の心と子の心と一ツに成つた一體の處で、今も夫と

同じことて、三界流轉と迷ふて居る私に、百寶莊嚴の淨土の跡式が讓りたさ、果上の萬德もろ〳〵の利益も、衆生に與たいとて、如來の方で御成就なされて、どうぞ淨土へ迎へ取り度いと、彼方の御誠を封じこめさせられたが南無阿彌陀佛の御手紙ぢや、罪や報の借金は、此の彌陀が殘らず引受けてやる、迷の凡夫の事なれば、十惡五逆の綴衣、五障三從の莚着たまゝ、何もいらぬ賴む機になるばかりで、彌陀が助けるぞと御成就なされた六字が、機法一體の名號我等が方に助けたまへの、參らせたまへのといふ機は迚も起されぬ、起したとても參らるゝ者ではない、夫を彼方のかたから、たのむばかりて助けるぞと、行者の機まで

を成就なされて十劫の曉に六字の名號は成就なされたれども、其機法一體の南無阿彌陀佛が、行者の方へ届かぬ間は、名號は機法一體に出來たれども、如來の御心と行者の心とが一ツにならぬ、是が機法一體と佛心凡心一體の變目の處、よつて聖人善知識の御使を以て、迷て居る我々の三界濁世の賤ケ家まで、南無阿彌陀佛の御聲が届き私共が稱ふ、るまでに成つたのが、先六字のお手紙の届いたのぢや、然れど名號のおいはれを聞ぬ間は、手紙は受取つても開封せぬと同じ事。彼方のお心と凡夫の心とが一ツにならぬ、依つて『ただ稱へては助からざるなり』、名號のいはれを聞け〳〵と、其の名號六字の封切つて御聞かせ下

されたが三經七祖の御釋、近くは御文の御教化、尼嚊々にも届く樣に御示し下された、先一ケ處申さば、御文に『阿彌陀如來の仰られける樣は、末代の凡夫、罪業のわれらたんもの』と、この六字の封切つて御聞せなされた、阿彌陀如來の本願のありたけをば、唯今の御意にお示しあらせられた此の名號のいはれをよく〳〵聞開いて見たれば十方恒沙の諸佛如來も、ましませども、此の私を罪も報も其の儘ながら、賴むばかりで助けるとは、三世十方に彼方ばかり、ヤレ嬉しや參りませうとなられた處が、如來の御心と行者の心と一ツになりた塲ぢや其かゝる者を御助け、參りましよとなりた機は、行者の心に起つたに違はなけ

れ共、吾が心から起つたではない、如來樣の機法一體の南無阿彌陀佛が、吾が心へ御届きなされた一念なれば、此處では機法一體と佛心凡心一體とは唯一ツ事。彼方のかたで成就なされた南無阿彌陀佛の御誠が届いたればこそ、かゝる者を御助は彼方ばかりと、晴ぬ往生に疑ひはれ、落付かれぬ淨土參りに安堵が出來て、親の誠が受取れて見れば百里二百里離れた旅に居ながら、最早親の心と一ツになり、綴衣着て居れどもはや親の跡取り、今日の我等も、まだ淨土へは參らず、迷の旅にさまようて煩惱惡業の綴衣着た身ではあれ最早極樂の跡取、正定聚の分位に住だ身の上、今日の夕暮、翌日の曙、何時命が終つても、無爲の都

に還り往きて、無生の生と仰られる蓮臺にすはり、無上の妙果を開く仕合者が、信決定の身の上ぢや程に、喜ばれよ。

第十三會

前席に於いて、機法一體と佛凡一體との異同を辯ずるに就いて、三科を立てゝ、初に正示すと、二に喩を擧ぐるの二科は辯じ了つて、第三の問答の一科を辯ずる事ぢや。問ふて曰、成程喩を以て聽聞すれは、借金も親が引受け、路用も出してくれて、綴衣のまゝで大事ない、戻つて跡を取るばかりぢやと、親の眞實を聞いて見たらば、ヤレ嬉しやと受けらるゝ筈、今も如來樣が、罪も報も彌陀が殘らず引受けてやる、十惡五逆の其の儘ながら、賴むばかりで助けると

三に問答

の仰を聞いたら、やうもなく信ぜるゝ筈、然るに安堵なるべき事を、今まで信じ兼ねて居りましたは、我身ながらも合點のゆかぬ心根、これは何とした心で御座りましょう。答へて曰、こゝに二ツの障があつて、如來の御心と一ツに成り兼ねて居るのである。其の二ツの障とは、一には邪見、二には自力。この邪見と自力にさえられて、今日まで淨土へ參る心になり兼ねて居た。先前の喩で申そうなら、親の手紙をよく讀んで見れば是非とも戻る氣になられればならぬ筈なれども、夫を戻る氣になり兼て居るは、一ツには今に喰いかねての、めりて死ぬる事も、寒さになれば、凍えて死なねばならぬことも何とも思はずに、身上を持つ

は面倒ちやの、親の膝下で氣兼するは氣づまりちやのと、我儘勝手をいふて、當座己が氣隨氣儘に寢たり起たりして居れば、是程氣樂な事はないと、自墮落に身を持崩して、一寸先の闇を知らぬが邪見こい者。そこで戻りましようの氣がおこらぬ。偖又二ツには、今に仕方のなくなる事も、親の手元でくらせば樂な事も、充分承知して居れば戻り度は山々なれども、如何に親が其の儘來いといふてくれたとて、親の前でいはれぬ樣な不埒もあり、近所隣の手前もあれば、綴衣や薦着た儘で、どうして家へ戻らりようと、迚も叶はぬ身を持ちながら、我身の淺間しいに目を掛け、せめて着物一枚でも、帶一と筋でもと、出來もせぬ工面に

心をくれて、戻りましようの思になり兼ねて居るのが、親心と一ツになられぬのちや、今銘々や我々も、本願名號をいはれは、朝な夕なに聞いては居れど死ねば地獄に落ちねばならぬ事を何とも思はず、後生の大事を大事とも思知らず、後生を願ふといへば難義な事の様に思ひ、御報謝を營めの、掟を守れのと仰られゝば、なんぼうか窮屈な事の様に思つて、其の日〳〵を人間の果報で着たり喰ふたりして居れば、是程の事はないと思ふて、眞實淨土參に望がおこらぬ、是皆轉倒推求の邪見のなしわざ、死なねならぬ身を持ちながらよもや死ぬまいと思ひ、墮ちねばならぬ身を持ちながら、いかな事なら墮ちはせまいと思ひ、

心の底には地獄や極樂があるやら、ないやら、死んで見ねばわからぬ位の邪見な心中から、大悲の御呼聲を聞きながら、ヤレ嬉しや參りましようとなり兼ねて居る。爰を御開山様は、『邪見憍慢の惡衆生信樂を受持すること甚以て難し』と御歎きあらせられた、此の邪見の障にさえられて、如來様の御心と一ツになりかねて居る。偖二ツには自力の障といふは、死なねばならぬ事も、飽迄合點し、落ちねばならぬ我身といふ事も充分承知が出來て居る故、思ふて見れば畏いは後生の行末、ごうぞ淨土へ參りたいと迄にはなりたれども、如何に如來の御慈悲ちやとても、此の様な心では、此の様な日暮では、と、己が親にも子にもいはれ

ぬ様な罪を造つた覺がある故、こうなつたら、あゝなつたらご、なられもせぬ我が手元に目をつけて、如來の親様の廣大深重なる御誠に氣が付かず、招喚の御呼聲に隨ひかねて居る故に、ヤレ嬉しやまゐりませうとなり兼ねて居る、是が自力に障えられて、佛心と一體になり兼ねて居る處、こゝを御開山様は『然るに薄地の凡夫底下の群生淨信獲がたく極果證し難き也何を以ての故に往相の廻向に由らざるが故に疑網に纏縛せらるゝが故に』、こも又『此の度疑網に覆蔽せられば更復曠劫を逕歷せん』こも仰られて、如來の大悲は深重なれども、衆生が自力にさえられて、參る覺悟になりかねて居るぞと宣ふ。こゝを銘々に我身

〳〵に引受けられて、どうでも死なねばならぬ此の身、いやでも往ねばならぬ未來、何と思案をして見ても、何一ツつとまらぬ、仕様摸様も盡きはてた今度の後生の一大事を、大悲の如來がそのまゝながら、我を賴め助けてくりようの御呼聲と聞分けられたら、彼此いふて居らるゝ場ではない、御辭退なしに罪も報も身のざまも、至心信樂己を忘れて、我身の罪の深きに目を懸けず、思切つてかゝる者を御助、ヤレ嬉しや參りませうと御受けが出來たら、そこが如來の御心と行者の心と一になりた場といふ者。偖親の誠が聞分けられて、我身の手元を顧ず、故郷へ歸る身になつたら、直様出立つして、假令道中が五日かくらうと、十

日からうと、日々道は運ばねばならぬ、戻る氣になりまし
たといふたとて、寢て居たのでは、御受が出來たのではな
い。歸りましようが誠なら、五十里でも百里でも、油斷なく
運ばねばならぬ、今が夫と同じ事で、如來の仰に隨ひ、參り
ましようと一念御受の出來た上には、淨土へ參るまで十
年かゝらうが、二十年かゝらうが、日々夜々に念佛申すが、
往生の行ぢや、爰を御開山樣は末燈鈔に『惠心院の和尙の
往生要集には、本願の念佛を信樂するありさまをあらは
さるゝには、行住坐臥をえらばず、時所諸緣をきらはずと
おほせられたり』と御示し下された、信じましたといふて、
稱へぬのは、戻る氣になりましたといふて、寢て居ると同

じ事依つて同じ鈔に『信心ありとも名號を稱へざらんは
詮なく候』と仰られた。然るに五日かゝらうが、十日かゝら
うが、故郷へ戻る運び心はどうぢやといへば、親の手紙が
届いた時、早跡取に定りて安堵の出來た上なれば、どうぞ
首尾よく家へ寄せて下さればよいが、何卒跡目相續させ
て下さればよいがと、案じ〳〵の道中ではない。一ト足
〳〵の運び心は、跡取身になりた事の嬉しや、待つて御座
る親の手元へ往かるゝ事の難有やと、喜び〳〵の道中ち
や。今我人念佛行者の、淨土へ參るまでの念佛の行の運び
ごゝろは、どうぞ助りたい者ぢや、參りたいものぢやがと
いふ、案じ〳〵の念佛ではない、名號の御手紙の届いた一

念に、如來の御誡を受取り、淨土の跡取、補處の菩薩と同じ身の上と、定めていたゞいた上からは、五年存命して居ても、十年ながらへても、淨土へ參るまでの念佛の稱へごころは參る身になつた事の嬉しや、久遠劫來待つて下された彼方の御側へ行かるゝ事の有難やと思へば、一返〳〵の稱名が、嬉しや有難やの御恩報謝の御稱名ゆゑに、信の上の稱名は、いさみの念佛なりとも仰られ、憶念稱名精ありとも御示しされた。

こゝをよく〳〵思はれよ、捕手に連れられて牢屋へ行く道を歩むのと、待つて御座る親の家へ行く歩みごゝろとを、比て見たら何あらう、昨日迄の私共の身の上は、惡業の

捕手に連れられて、日々夜々に地獄の道を歩んだが、今日は夫を轉じかへていたゞいて、久遠劫來待つて御座らせれる如來樣の御膝下へ參る身になつたは、嬉しいやら有難いやら、面白いやら、憂ひもつらいも僅の道中、世渡るたつきに、商するのも、奉公するのも、淨土參の旅の道草、喜〳〵日暮の出來るのが信決定の身の上と喜はれよ

第十四會

上來佛心凡心一體のお謂長々と御沙汰に及んだ。時に御聽聞を申せば、御文の思召も分る御敎化の御謂も聞へる、けれ共分り兼るは我が心の底、假令一代經が分つても、我身が今眼を塞いだら出て往かねばならぬ後生の一大事

が分らねば、學問の甲斐も聽聞の所詮もない、此程御座を重ねて聽聞は出來たが、愈我が心底から今迄の邪見憍慢疑心、自力の心を飜して、助けて吳るの御誠が、我心へ引受けられ、淨土參の身になられば、如來の善き御心と同物になりたではない、如來のよき御心と同物にならねば、今度の淨土參は叶はぬ。爰を能々聽聞せられよ、多くの人が聽聞申す時は、明に思はれ難有う御座りますけれど、我家へ戻るとハヤ其心がなくなりますの、私は籠耳で、右から左へ拔けて仕舞ますの、愚で何でも一ツ覺えて居られませぬ故、内へ歸つて土產がないの、家内丈では喜の種がない故喜べませぬのと、唯當座の申譯のみして居る者が、多い

其の樣な事では、息の切塲の間には合ぬ。蓮如樣は左樣は仰られぬ。『他力の信心といふ事を深く心中に貯へられ候ひて、その上には、行住坐臥に念佛を申さるべき計りなり』と宣ひて、行往坐臥とは、御堂へ參つたり、御法座へ出た時ばかりの事ではない。又の御言にも『明に耳の底に殘して、一流の他力眞實の信心今に堪せざる者也』と仰れた。依之内の土產がないの、喜の種がなくては喜ばれぬのと申して居るのは、全體聽聞の目的が違ふて居る。唯因緣物語やお喩や、御聖敎の御文、法門の片端を聞覺えて、内の土產にする意、喜の種にする思ひやに依つて、聞く時は難有くても、其の座が過ぎると覺えて居られぬ故、ない物探す樣に

なつて、お喜申す種もなくなる、家への土産は夫ではない。御喜の種を外で探すには及ばぬ、今息が切れると地獄へ墮る私を、助けて吳るのお呼聲と、聞受けられ、斯る者を御助と、戴ける身になれば、喜の種も内への土産も澤山ある。地獄の罪人が佛に成る、此より外にお喜の種がどこにあらう。喩へて申さば、今首切らるゝ罪人が有つて、土壇場に据えられ、太刀取が後へ廻り、前にはお役人が御座つて、罪の次第を讀聞せられた時、一々覺のある我身の惡事なれば、言譯の仕樣もなく、打首と仰られても、火刑と仰られても、上をお恨み申そう樣のない罪人が其の咎書を讀聞せられた後で、其方重々不届の罪人なれども、此の度は御上

に於て、各別の御仁惠を以て、助命仰付けられる、已後は急度嗜めよと仰聞られた其の御言が、聞へて、繩を解いて助けて貰ふた身に成つて、我家へ戻つて見られよ、内へ土産がないの喜の種がないのといふて居られまい、お役人の口上や、咎書の文句は覺えて居られまいとも、今殺される命を助けて吳るの御一言が、忘れたふても忘られやうか、假令五年十年生延びても、現在助けて貰ふた命が喜の種ちやもの、一生涯忘れられぬ、今が夫と同事、地獄一定と土壇場へ引き据えられ、無常の太刀取が後へ廻はり、聞けば聞く程仕方のない此の身、今息が切れると、無間の湯玉の中へ沈む筈の私を『超世無上に攝取し選擇五劫思惟して』

と、大慈大悲の親様が、助けてやるとある御呼聲が、心の底へ聞受けられた一念に、三界繫縛の業の繩目が切れて、淨土參の身になつて見られよ、御教化の御言や、喩因緣物語は覺えては居られまいが、地獄へ墮ちる我身をば、危い所で呼懸けられ、浮雲ない此の身を抱留められて、無量永劫の命拾ひを致しました身が、助けて吳うの御勅命が、忘れたうても忘られやうか、内への土産と餘の物探すには及ばぬ、喜の種を外に尋るには及ばぬ。幾度いふても、何時思出しても、今死ねば地獄へ墮ちる此の身を、淨土へ參る身にして貰ふた事の嬉やと思ふたら、是程の喜はあるまい。有難い事ではないか、此の事一ッ何度いふても語つても

喜び盡さるゝ事ではない、依つて赤尾の道宗は、一ッ御言を幾度も〳〵御聽聞申したれども、是迄いふ飽足はなかつたと申された、爰を能々思知られて、唯耳にばかり聽聞し、譯や理窟を聞いたばかりで、アノ御教化がお上手ちやの、此の法談は下手ちやのと、御教化の善惡ばかり差別して居る位では、千座萬座聽聞しても、我身の後生は聞付けられぬ、今息引取ると地獄へ落る此の身を、助けて貰ふた御呼聲一ッが、聞いても〳〵飽足りのないお謂ぢや程に、當座言譯の分際では、今度の一大事には向はれぬ故、愈々如來の御呼聲善知識の御教化を我身一人と戴いて、淨土參の身になりて、昔に變る今日の我身の仕合を喜び

枕つけても目が覺めても、命限りは大切に喜ばるゝが何よりの仕合。

二に光益の明を示す
に二に總じて初に光益を示す
に三に初に信前の照益を示す

第十五　會

大科を分ちて二となす中初に佛心凡心一體の義は辯じ終る、二に光明の益を示すに二、初に總じて光益を示すに三、初に信前の照益を示す。すべて光明の御利益に就いて、信前信後の益が分る、信を得ぬ前の光明の御利益と信を得てから後の光明の御利益とに分かる、三帖目初通の御文の『彌陀如來には、すでに攝取と光明といふ、ふたつの事はりをもて、衆生をば濟度し給ふなり、まづこの光明に宿善の機のありて照されぬれば、つもる所の業障の罪みなきえぬるなり、さて攝取といふは、いかなる心ぞといへば、この光明の緣にあひたてまつれば、罪障ことゞく消滅するによりて、やがて衆生をこの光明のうちにおさめおかるゝによりて、攝取とは申すなり、この故に阿彌陀佛には攝取と光明とのふたつをもて肝要とせらるゝなりときこへたり』とある。是が信前の光明と信後の光明の利益を分けて聞かせたまふ御示、依つて御和讃でも御文でも、光明を述べたまふには、信前と信後とが分かれてある先初に光明の御利益を申さば、和讃には『盡十方の无导光は、無明のやみをてらしつゝ、一念歡喜するひとを、かならず滅度にいたらしむ』『无导光の利益より、威德廣大の信を

えて、かならず煩惱のこほりとけ、すなはち菩提の水となる』と、斯樣な御示が數々ある、今一々申す迄もない、御文では五帖目第十二通に『この光明の緣にあひたてまつらずば、無始よりこのかたの無明業障のおそろしき病のなほるといふ事は、さらにもてあるべからざるものなり、しかるにこの光明の緣にもよほされて、宿善の機ありて、他力信心といふ事をば今すでにえたり、是しかながら彌陀如來の御方よりさづけましまたる信心とはやがてあらはにしられたり、かるがゆへに行者のおこすところの信心にあらず、彌陀如來他力の大信心といふことは今こそあきらかに知られたり』と、光明から信心と次第なされた

る御教化は數々ある、心ある者は氣を付けて聽聞すれば分かる事也。

偖凡て信前信後に付いて、有照の光明と無照の光明とが分かる。先有照の光明をいへば、大經に彌勒、阿難、を始め一會の大衆に、皆極樂淨土を拜ませて下された。其の時は此の娑婆から十萬億土の御淨土まで唯一面の光明となつて盡十方の無尋の光明を目前拜ませられた。又觀經では韋提希夫人が釋迦如來の光明の御力で西方の極樂淨土の輝きわたるお莊嚴を拜まれた、今日の吾人は煩惱に眼さえられて、目前光明を拜み奉ることはならねども、如來の光明に御隔てはない。善導大師のお稱へなされた念

佛は、一遍〳〵が化佛となりて飛ばせられ、又熊谷蓮生坊が東國へ下らるゝ時、藤枝の宿の酒屋で稱へたまひた十念の念佛が、十體の佛となつて、主人の口へ飛込ませられたといふ事もある、善導大師のお念佛も、法力坊の念佛も、我等が稱へる念佛も、行體に變りはない、夜の寢覺のきたない口から稱へる念佛が、光明赫奕たる南無阿彌陀佛で御座らせられた然れども煩惱に眼さへられて、拜むことのならぬは、此方のあやまり。依つて御開山樣は『現前當來遠からず、如來を拜見うたがはず』と宣ふ現前にも宿因深厚の人は、光明を拜んだ人はいくらもある。各々や我々は如來の光明は拜まれねども、唯今目前に光明のお照しを

見奉る事を申さば、日輪月輪のお光を蒙るのが、直に此身に有照の光明をいたゞくのぢや。唯信鈔文意に『この无导光佛は觀音とあらはれ、勢至としめす、ある經には觀音を寶應聲菩薩となづけて日天子としめす、これはよろづの衆生の无明黑闇をはらはしむ、勢至を寶吉祥菩薩となづけて月天子とあらはれ、生死の長夜をてらして、智慧をひらかしむるなり』と仰られてある。然れば朝夕拜む日輪月輪が直に無导光の御照なり。依つて和讃には『觀音勢至もろともに、慈光世界を照曜し、有緣を度してしばらくも休息ある事なかりけり』と示させられた、休息とはやすみといふ事、人は夜枕をかたむけて寢る、夜が短ければ、晝寢も

して休むが日月が晝夜の御休みはない、其の御苦勞は何人のためぞといへば、吾等衆生は三界六道の間に於て、此の人間の生でなければ、佛道修行は出來ぬ。此の人身を養育せんがために、晝夜お照し下されて、五穀を始め一切萬物を生ぜしめたまふ。此の御惠に依つて吾等衣食住を調へて居る、此の御光があるまいなら、米一粒綿一ト房でも出來はせぬ、然れば着たり喰ふたりする迄が、皆如來樣の光明のお惠、飲まず食はずに念佛も申されず、裸で寺參も出來ぬ、それを日月のお照しがあればこそ、心置なく參下向も出來ると思へば、箸から落ちる雫までも、皆光明のお育ぢや、斯く人界に此の身を養育て下さるゝのは、身過世

過にかゝりはて、錢金ためたり、身上造りたり、妻や子供に愛着して惜や欲やに日を送り、死んで地獄へ落よとて、晝夜休まずお照しなさるのではない、どうぞ今生で佛法を聞き後生を願へかし、未來の大事を仕終せて、極樂淨土へ參らせたいといふ御慈悲からこそ、お照しなさるゝ如來の御光明、然るをば、放逸懈怠に暮し、後生も願はず、念佛も稱へず、空く三塗に沈まうなら、眞に大悲の御苦勞を水の泡として仕舞のぢや。親が折角懷の中から育て上げ、布團の濡れたる時は、乾いた方に其の子を寢させ、濕つた方に我身は寢ね裸襁の汚れたる時は袖を以て不淨を拭ひ、胸廓よりは甘露の乳を出し、魚を食はせては骨を捨てる事

を教へ、菓を與へては、皮を去る事を教へ、晝夜寒からぬ樣、あつからぬ樣と、心を盡して惠育てるのは何故ぢやと思へば、急度一人前の人に育て上げて、其の身も治り親も心を安めたいと思へばこそぢや。然るに人丈に成るや否や、大酒飲んだり、博奕打つたり、果は蓬着て人の門に立つ樣に成らうなら、實に親の骨折は皆無汰事、今日の吾人も如來のお光明で生々世々、惠育てゝ、此の人間にまで產出して、喰ふ事や着る事まで世話やいて下されたのに、邪見放逸に日を暮して、三惡道へ沈まうなら、如來の御苦勞は皆無汰事、御和讃に『西路を指授せしかども、自障々他せしほどに、曠劫以來もいたづらに、むなしくこそはすぎにけれ』

と宣ひて、今日の吾人曠劫以來彼方に御苦勞かけながら、無汰骨折らせ參せた身の上ぢやに、此の度ばかりは助けずにはおくまいと、賤が伏屋にまで立かゝらせられての御化導を、徒事にはなるまい程に、何卒大切に聽聞して、御待遊ばす極樂淨土へ往生の素懷を遂げ、生々世々の積る御禮を御膝元で申上げましようが何より肝要。

第十六會

唯今申述べた通り、光明の御利益に就いて、暫有照の光明あり、又ピカ〳〵と光るばかり光明ではない、相を變へ貌を改めて、色々にお手術をめぐらして、衆生に緣を結ばせらるゝが光明の御利益、淨土の大心海より此の娑婆界

へ現れたまふ善知識の御教化も、皆光明の徳から現るゝ、依つて『聞光力のゆへなれば』と仰られて、光明を聞くと仰られるが、善知識の御化導を聞く事て、和讃に『相好ごとに百千の、光を十方にはなちてぞ、つねに妙法ときひろめ、衆生を佛道にいらしむる』とも仰られてある。夫のみならず、地獄の罪人に御縁を結ばせらるゝためには、地獄の罪人となりて、衆生を導かせらるゝ。既に滿米上人が地獄へお入りなされた時、袈裟を着て火の中に燒れて居る罪人があつた故、罪人も多い中に、袈裟を着ながら地獄に落ちるとは、如何なる業ぢやと御尋ねなされたれば、我は實業の罪人にあらず、六道能化の地藏菩薩なり、普代衆生の行で、

晝夜六時に衆生に代りて、此の苦を受くると答へあらせられた。滿米上人深く感ぜさせられて、其の御相を娑婆へ歸りてから、其のまゝお刻みなされたか、山城國矢田寺の地藏菩薩、其の同木同作が、越前國羽生田の地藏菩薩ぢやと申す事なり。

又西行法師の選集鈔に、西行法師が或時、濱邊を通られたれば、船の中から一人の男が出て、西行の袖に縋りて、どうぞ私を御弟子になされて下されと願ふた、其の時西行が、そなたは今思付いて、急に出家したいといふは、如何なる譯ぞやと申されたれば、彼の男がいふ樣、されば御座る、唯今一疋の龜を取りまして、夫れを殺うとしたれば、龜

が血の涙を流しました、餘りの哀さに是は殺されまいと申したれば、仲間の者が申すには、何程涙を流そうとも、血を吐こふとも、殺すが我等の身の生業ぢやと申して、情なくもとう〳〵殺しました、其の目くろめきて、苦むありさまを見ましたれば、如何なる前生の業で、此の樣なつたない業をする身とはなりましたか、此の世は僅な間ぢやと思へば、身も世もあられず、そらおそろしく存じましたれば、俄に出家する心になりました、何卒袈裟衣を與へて御弟子になされて下されと願ふ。西行も斯く迄願ふ者なれば、出家させても苦しくもあるまいと思はれて、髮を剃り袈裟衣を與へて、名を西道とたまはりた、彼の男夫より高

野小川の邊を行脚して、遂に西山に庵を結び、念佛三昧にして目出度往生の素懷をとげたと書きおかれた。夫に就いて西行が申されたには、彼の男が此まで幾千萬の物の命は取りつらんが、後生とも菩提とも機の付かなんだのが、今の龜を殺して後生の大事に機が付き、菩提心を發したは、其の龜は恐くは唯の畜生ではあるまい、如來樣が龜となりて、彼の男に後生の大事を思ひしらせて下されたのであらうと申された。或は塵塚の螻ともなり、池の蛙ともなり、同類の衆生に緣を結んで下されたといふ事もある。中古の事ぢやが、佐渡國で夫婦の中に一人の子を持つて、殊に柔和で、發明な子であつたが、六歳の時急病で命終

りた、眞に掌中の珠を失ふた如く歎き悲しんで、其の子が手習した文庫の中を見たれば、一首の歌を書殘して置いた、其の歌に『戀しくはたづね來て見よ越路なる、椎谷の里のふたらくの山』と書いてあつた。普陀落とは觀世音菩薩の淨土の事、兩親打驚いて早速渡海して椎谷の觀音樣に參つて見たりや、觀音の御寶前にも同じく、其の子の手で書いた歌が備へてあつたと申す事也、或は普賢菩薩は室の津の傾城になつて、大悲の肌を愛着の衆生に汚されて、御緣を結ばせられた事もある。大經の中に『若三塗勤苦之處に在りて、斯の光明を見たてまつれば、皆休息する事を得』と說かせられたも、此等の事と見えたり。地藏菩薩も、觀

音薩埵も、普賢大士も、皆阿彌陀如來樣の大悲闡提の相を現じて、衆生濟度のため、分身化現のお相ぢやと聽聞して見ますれば、此の世の中に子に別れて後生に機のついた者もあり、妻に後れて菩提心を發した者もある、そこから思ふて見ますれば、別れた妻が大悲方便の御攝化やら、先立つた子が菩薩應化の方便ぢややら、迷の衆生にはわからねども、今に淨土へ參つてみると、あの時は親ともなりて下されたか、子ともなつて下されたかと、生々世々の御恩の程が、淨土で明に知れるぞと宣ふ。故に法然樣は、我等のために捨てたまへる御肉は、大千界の大地の如く、しぼらせたまふ御血汐は、四大海水の如く、捨てたまへる御眼

は、恒河の砂の數の如く飲血噉肉の衆生、なさけなくも菩薩利生の肌を破り、求食著味の有情、はばかりなく薩埵慈悲の肉を食ふ』と宣へり。我等は迷ふて知らねども、大悲の肉を喰ふて來たぞ、血汐も吸ふた來た程にと、お聞かせなさるゝ、此の御恩を思ふて見ますれば、骨を摧いても、身を粉にしてもとは、お手强い御言の樣に思ふたが僅に一生の此の體を、摧いたとて粉にしたとて、久遠劫來の御恩にくらべて見れば、大海の一滴も報ぜられる事ではない。『一切衆生の骨は、毘布羅山より高しと雖も、佛道修行のために一骨もすてず』と宣ふ。是迄生變り死に變り毘布羅山といふ山程骨を捨て、體は捨てたなれども、後生菩提のため

にとては、骨一本も捨てた事はないとある。然れば生々世世彼方ばかりに御苦勞をかけて、御恩を蒙りた此の身の上、宿善目出度此の體が、我身の後生の役に立つ體となり、此の手足が御恩報謝の用に立つ身と成つたと思ふたら、せめて命ながらへある間は、御報謝に我體いとふべき筈はない、身に叶ひ心に及ぶ丈は、永い御恩を短い命で報ずるのぢやと心得て、寐ても悟めても行往坐臥、御恩報謝の營を命かぎりに嗜まれましようが何より肝要。

第十七　會

總じて光明の益を示す三科の中、初めに信前の益は辯じ了る。二に信後の光明、如來の光明の御力で我等が罪障を

照破りて下さるゝ處で、光明に攝取られて淨土へ參る迄は、夜も晝もお守り下さるゝ、此の信後攝取の御利益は、御和讃でも御文でも數々お示しなされる事で、源は觀經の眞身觀に『光明遍照、十方世界、念佛衆生、攝取不捨』の文に顯れて、夫を御開山樣は、『十方微塵世界の念佛の衆生をみそなはし、攝取してすてざれば、阿彌陀と名づけたてまつる』と仰られた。あの御和讃は阿彌陀經の心を述べさせられた御和讃にして、阿彌陀經に攝取のお辭は說いてはない。こゝは正く觀經の攝取不捨の經文に據らせられた思召。總て祖師は三經一致と御覽遊ばして、觀經には淨土の事を極樂々々と說かせられて、安樂淨土の名は觀經には說

いてない。然るに觀經和讃の別選所求の處では、『恩德廣大釋迦如來乃至安樂世界をえらばしむ』と遊ばされた、觀經和讃なれば極樂世界をえらばしむとあるべきを、大經の安樂世界をお出しなされた、此が觀經の顯說からいへば、觀經に說いてある極樂は方便化土となる。夫を隱彰の實義から伺へば、韋提希夫人の拜んだ極樂が、直に大經の眞實報土ぢやぞと、知らしめんがために、觀經和讃に、大經所說の安樂世界をお出しなされた。此の祖意を御相承なされて、蓮如上人は御文に『釋迦韋提、調達闍世の五逆をつくりて、かゝる機なれども、不思議の本願に歸すれば、かならず安養の往生をとぐるものなり』と仰られて、極樂とはい

はずに安養と仰られた。今も攝取不捨の經文を、外の智者聖人は皆觀念の利益と遊ばす、夫を吾祖は觀念の行者が折角觀法を成就なされて、淨土の如來樣を拜んで見れば、觀念の行者には目もかけず、愚な尼嚊々が五慾の寐屋に穢れ果てゝありながら、疑晴れて南無阿彌陀佛〳〵と稱ふる念佛の行者を、目も放さずにお護り下さる念佛の利益となされて、觀經の攝取不捨の經文を、彌陀經の和讃にお述べあらせられて、『十方微塵世界の念佛の衆生をみそなはし』と仰られた。是が直に三經一致の巧妙の御釋と申す者ぢや。依つて御和讃の上を心を留めて拜見して見られよ、『彌陀の本願信ずべし、本願信ずる人はみな、攝取不捨

の利益ゆへ、等正覺にいたるなり』と、阿彌陀經の念佛が、顯說でいへば自力念佛なれども、隱彰から伺へば、執持名號一心不亂の七日期限の念佛が、他力の信心より顯るゝ報恩謝德の念佛なれば、攝取不捨の利益も、信心の利益に遊して、信決定の人は、五年でも十年でも、淨土へ參るまでは、此の光明の中に攝めおかるゝぞと、信後の照益をかずかずのべてお聞かせなさるゝ。『煩惱にまなこさへられて、攝取の光明見ざれども、大悲ものうきことなくて、つねに我身をてらすなり』とあるも此の思召。之を御相承なされて、蓮如上人は、御文に信心の利益に此の光明遍照の文をところ〴〵に御引き遊す『斯樣に信ずる衆生を、普く光明の

中に攝取して、捨てたまはずして、一期のいのちつきぬれば、かならず淨土におくりたまふなり、この光明の緣に逢ふによりて、罪障ことゝく消滅するによりて、やがて衆生のこの光明の中にすむ身なりと思ふべし。さて命も盡きぬれば、速に眞實の報土に送りたまふなり』と宣へり。然るに我等凡夫は光明を拜むことがならぬ故、光明の中に住む身じややら、光明の中に住まぬ身じややら、そこが明にわかり兼る。依つて御一代記聞記二百五條に三井寺の瞻西上人といふ人が、攝取不捨のことはりが知りたいとて、雲居寺の阿彌陀如來樣に祈誓をかけた所が、或夜の夢に、阿彌陀如來が、上人の袖を捕へたまふ、こは勿體ないと思ふて、

後去りして逃げられたれども、しかと捕へて放したまはず、攝取といふは逃ぐる者を捕へてをきたまふやうなる事とこゝにて思付けりと仰られたといふ事を、蓮如上人が引事になされたとある。爰が御文では、『誓願の不思議を信じて、一念の疑心なきときは、いかに地獄におちんと思ふとも、我がはからひにて地獄へもおちずして、極樂へ參るべき身なるがゆゑなり』と仰られたが、これと同じ事で、今日の我等は、することとなす事が、皆地獄の業なれば、此の樣な者が、淨土參の身ぢやとはいはれ樣か、ほんに己は地獄へ墜ちるぢやか知れぬと、案じ心も出やうか知らんけれども、一度誓願の不思議を信じて、賴む一念に光明に攝

め取られぬれば、我等は逃げんと思ふても、如來樣が放し
はなさらんと仰られた御文のお示。子供抔が牛や馬に蹴
られるのを辨へもなく、堀溝へこけ込む考へもなく遊ん
で居れども、大人が側に守つて居れば、牛や馬にも蹈ませ
ず、堀溝へも落さぬ。依つて之を守といふ、もりはまもりの
略語で、大人が守りて居れば、怪我あやまちはさせぬ。念佛
の行者を常に大悲の光明てお守りなされ、淨土へ參る迄
は、勿體なくも大悲の彼方が私のもりをして下さるゝ故、
我身は地獄の業で日は暮せども、惡趣へ沈む怪我あやま
ちもせずに、命も盡きぬれば速に眞實報土へ送りたまふ
と御意あらせられた。仍つて野で死なうが山でのめらう

が、生涯連添ふた妻や子は、死に場がわるければ、臨終の間
に合はぬ事もあらうけれど、お守りなされる攝取の光明
は、野でも山でも離れはなされぬ、故にどこで死んでも彼
方がつれて淨土へ參らせてくれるぞと仰られれば、賴母
敷哉や嬉しき哉や、過去の業なれば、どの樣な死に樣をせ
まい者でもなけれども、假令火に燒け水に溺れ、女子なら
難產で正氣を失ひ、臨終に若念佛一遍稱へられずとも、妄
想しても光明の中、轉倒しても攝取の懷なれば、此の世の
業が盡きて、娑婆で目をふさぐ時が永の迷の暇乞ひ、再び
眼を開く時は、極樂淨土の華の臺へ、如來樣が生れさせて
下さるゝ、誠に夢のさめた樣な、往生の素懷ぢや程に喜ば

れよ。

第十八會

三に一に歸することを述ぶ

唯今申通信前の光明の御利益と、信を得てから淨土へ參る迄の御利益と、判然として分れども、歸する處は唯一ッの大悲の御光明。總じてこの光明の利益を示すに三科を立て、信前の益と、信後の益とは、前來聽聞に及ぶ通。第三に一に歸することを述ぶ。信前の光明は、先この光明にあひたてまつれば、罪障がことゞく消滅するとのたまひて、業障のある中は、光明に攝取らるゝことがならぬ。我子が傷寒を煩ふて、大熱して居るもの故に、抱いて乳房を含ませたくても、はねまはりて中々抱かれぬ。そこで親が醫

者にかけたり、藥を呑ませたりして、大熱がさめた處で、乳が呑みたい心が起る、そこを親が待ちに待ちて抱取る、親が抱取りたからは離しはせぬ、そこが信後の照益。然るに照さるゝ方からいへば、攝取と光明との二ッなれども、能照のお照しなさるゝ方からいへば信前の光明も、信後の攝取の光明も、更に別はない。依つて覺如樣は、願々鈔に『信心歡喜乃至一念の機を攝益したまふ、その機はまた遍照の光明にはぐゝまれて、信心歡喜すれば、機法一體になりて、能照所照ふたつなるに似たれども、またく不二なるべしと』仰られた。善導の御釋では、光明遍照は總光となされ、攝取不捨は別光となされる。そこを蓮如上人は、『攝取と

光明といふたつをもて、衆生をば濟度し給ふなり』と仰られたれども、今の覺如上人の御指南から、あの御文を氣を付ていたゞいて見られよ、『この光明の緣にあひ奉れば罪障ことごとく消滅するによりて、やがて衆生をこの光明のうちにおさめおかるゝによりて、攝取とはまうすなり、この故に阿彌陀ほとけには、攝取と光明との二をもて肝要とせらるゝなりと聞へたり。されば一念歸命の信心の定まるといふも、この攝取の光明にあひたてまつる時剋をさして、信心のさだまるとはまうすなり』と、この信前にお照しなされる光明が遍照の光明、遍照の光明に惠まれて、信心を得るのぢやによりて、別に攝取の光明があ

るてはない、よりて唯今の御文に『阿彌陀如來の遍照の光明の中に、おさめとられまいらせて、一期のあひだはこの光明のうちにすむ身なりとおもふべし』と、遍照の光明が直に攝取の光明『能照所照二ッなるに似たれども、全く不二なるべし』只今斯樣に顏をならべて居る人數の中に、信を得て喜ぶ人もあらう、まだ落付き兼ねて聽聞して、信が得度と思ふて居る人もあらう、又どの樣な事を談ぜらるるやら、聞いて見樣と思ふ位で、此の御座に居る人もあらう、唯人並に參詣して御座の始から終まで眠つて居る人もある、子供は人の集るのを喜んで、御堂へ來て人の聽聞の邪魔になる、參つた銘々は心中はいろ〳〵さま〴〵な

れども、如來の大悲に御隔ては御座らせられぬ、一人〳〵に抱取る樣に思召すが如來の御慈悲、爰をよく〳〵聽聞せられよ、今此の御座にも信を得て喜ぶ人と、まだ信も得ずに只今死なば地獄に墜る人と、兩人ならべて御覽なされては、淨土へ參る者をお喜びは勿論なれども、信を得ずしてうか〳〵聽聞し、今が今地獄へ墮る業人を、猶更不便や可愛やと思召すが如來の大悲ぢや。親の傍で給仕して居る辛抱な悴と、不孝不身持で牢屋に繫がれて居る子を列べて思へば、子の方からは隔てがあらうとも、親の心では寢ても覺めても、牢屋に居る子が忘られぬ。然れば牢屋の中に居ても、親の慈悲は蒙つて居る。今も夫と同じ事で、

佛敵となり法敵となり、勿體なくも正眞の如來の御眼をくり、ぬいて、生きながら大地が裂けて地獄へ墮つる樣な大罪人でも、抱付いてお慈悲の涙をそゝがせられるが、彼方の御慈悲。これに依りて所照の照される方からいへば、光明と攝取と二ッにわかれども、能照のお照しなさる方からいへば、信前の光明も信後の光明も、更に二ッはない。隔てのない御慈悲を此方から隔てゝ居るのぢや程に、爰を喩へて見ますれば、今我が子が狐にばかされ野山のはてに迷ふて居る。夫を親が尋ねて、野末山奥を尋廻る。『迷子や聲のかれしは親ならん』といふ句がある。迷子尋ねるために、近處合壁の人も出てくれる、迷子の〳〵の三太郎

ヤーィと呼び廻る中にも、他人は油斷もあれば、聲にひゝもあるが、眞實の親は少も聲に休みがない。聲を限りに我が子の名を呼ぶ故、蔭で聞いても、多勢の呼聲の中で、聲の嗄れたが、迷子の親に違ないといふ句の意なり。斯樣に三日も四日も尋廻りて、やう〳〵山中で我が子を見付けて、やれそこに居たかと呼掛けたれども、野や山中を結構な座敷と思ひ、狐を友達や兄弟と思ふて居る故に、親が呼掛ても氣がつかぬ。抱取らうとすれば逃げてあるく。夫を親がやう〳〵押付けて、こりやよく聞け、爰は山中ぢやぞ、野中ぢやぞ、我が友達ぢやと思ふて居るは、皆狐ぢや狸ぢや、親が來たぞ、内へ戻れといふた聲が始て聞えて、さてもさ

ても爰は野末山中であつた、友達や兄弟と思ふたは、眞實の友達や兄弟ではなかつたと氣が付いて、やれ嬉しやと親に抱かれ、親に手を取られたら、モウ何處へもやらぬ、我が家まで連れて戻るに違ひはない。今日の銘々や我等も、煩惱の狐にばかされて、三界流轉と野末山中を迷ひさまようたを、大悲の親樣が、十劫の昔から招喚大悲のお聲を嗄して、呼掛けて下さるゝ、遍照の光明で尋ねさがして下されて、今賤が伏屋まで立掛らせられたのは、山の澤で親が我子を見付けた如く、サァ親が來たぞ、淨土へ連れて行くぞよと、呼掛けて下されたれども、迷の娑婆の野や山を、何時までもかうして居らるゝ結構な座敷の樣に思ひ、妻

や子供は、眞實に我身の未來迄連添ふてゆかれる樣に思ふて、假の契の妻子眷屬を何時までもかうして居る者の樣に思ふて賴にし、如來のお呼聲を今迄聞受ける心がない、却て逃つ隱れつする私を、遍照の光明で押詰めて下さるゝ、南無阿彌陀佛のお呼掛け、此の婆婆は『三界無安、猶如火宅』と、恐しい野中ぢやぞ、山奥ぢやぞ、妻や子供は親切な者ぢや、何時までも一ッに居らるゝ者と思へども、子は三界の首枷、妻は輪廻の絆、迷ひの道連にはならうとも、覺の助けにはならぬぞよ、眞實の親が爰に居たぞと、呼掛けて下された大悲のお勅命が、始て我心へ聞受けられ、今迄は假の浮世を常住の處の樣に心得、連添ふ妻子眷屬に貪着

して、如來の御慈悲を餘處に聞いて居りましたが、今目をふさいで行く身になれば、大千界を尋ねても、眞實の親樣は彼方ばかりと、大悲に縋る一念の場で、光明の懷に抱取つて下され、臨終の夕には、眞實報土へ送り屆けて下さるゝ。爰を今の喩で思知られよ、子の方には隔てはあれども、逢ぬ先に尋ねた親も、逢ふて抱取つた親も、親の眞實に變りはない。今もそれぢや、行者の方に隔てはあれども、信ぜぬ先の光明も、信じた今の攝取の利益も、如來の大悲に變りはないそこを『能照所照二なるに似たれども、全く不二なるべし』と仰られた。此のおいはれを聞受けられてある子なれば、今此の御座にも居いた人もあらう、未決定の人

もあらう。聞付けぬ未決定の人は、いよ〳〵大事に聽聞して、大悲の親樣に抱取られ、淨土參の身となられよ。又信じた人は、知らぬ昔を思ひやり、永々御苦勞かけました事の勿體なや、今は大悲の光明に抱取られ、淨土へ參る身にはなりたれども、生きて居る間は我儘だらけの此の私、彼方の光明のお力があればこそ、極樂淨土へ送屆けて下さることの嬉しやと思へば、命の娑婆にある中には、晝夜朝暮彼方の御苦勞の御手は休らぬ者をと、寢ても覺めても御恩の深重なることを思ひやりて、華の臺で眼を開くまでは、稱名相續怠らぬ樣に、大切に嗜まれよ。

二に別して光明の益を示す

初に二に現益を辯ずるに

二に初に總じて五個の益を辯ず

光明の益を明すに就いて、初に總じて光明の益を示すの一科は辯じ了る。二に別して光明の益を示すに二、初に現益を辯ずるに二、初に總じて五個の益を辯ず。『光明の中に攝取れ參らせて、一期の間は此の光明のうちにすむ身なりと思ふべし』とあるまでは現益。『さて命もつきぬれば、速に眞實の報土へおくりたまふなり』と仰せられるが當益といふて、死んで淨土へ參らせて下さるゝ御利益。此の世で蒙る攝取の御利益に就いて、今の御言に『一期の間は、此の光明の中に住む身なりと思ふべし』と仰られた御言は、如何なる愚な者が聽聞しても、御文面はよく分れども、分り兼るは我が心の底。何程御和讃や御文の御教化が解り

ても、我が心の底に、出て行く未來の一大事が明かにわからねば聽聞の所詮はない。唯今のお言に『一期の間は此の光明の中にすむ身なりと思ふべし』と仰られた。一期とは一生涯の事で、五年でも十年でも、存へ居る間は、此の光明の中にすむ身ぢやと、思へと仰らるゝ。愈〻皆が枕付ても眼が覺めても、光明の中に住む身ぢやと、心底から思はるるか思はれぬか、御法義聽聞の肝要。善知識に値ふては、佛法を聽聞し、同行に睦みては信心を研くべし、と仰られるは愛ぢや、然るに凡夫といふ者は、淺間敷者で、我と我が心が分り兼ねる光明の中に住む身ぢやと思ふて居ながら、住まずに居る者もある。光明の中に住みながら、夫がわかり

兼ねて居る者もある。夫れをよく調べて見るには、善知識の御教化を以て吟味して見ねばならぬ。凡て物を量るには、現量と比量と聖教量といふ三つがあつて、現量とは、是は何貫目あらうかと思ふ時、秤に掛けて見れば何貫何百目ある、是は何尺あらうかといふ時、物指を當て見たれば、何尺何寸あると取つたか見たかに量知るを現量といふ。比量といふは、物を比べて知る事で、富士の山はどの樣な山ぢやといふに、富士の山を持て來て見せる事はならぬ、其の時は向に見ゆる金峰山の如くぢやと聞かせる、西國の雪の降ぬ處の人が、雪は如何なる者ぢやと尋ねた時、綿を積んで此の樣な物ぢやといふ、是が比量といふ者。然る

に比量にも現量にも及ばぬ事がある。是から日輪の御座る所迄何程ある、日輪の大さが何程の物ぢや、あの中に何があつて世界を照すといふ樣な事は、比量にも及ばぬ、是を量るには、聖教量といふて、如來金口の經說を以て量知るより外はない。又如來の金言は、一度金口を出た事には、間違は一つもない依つて現量より比量より慥な者は聖教量ぢや。そこで吾人の身の上が、愈光明の中にすむ身となられたか、なられぬかを調べて見るには、如來の金言、善知識の御教化の聖教量を以て調べて見るより外はない。其の善知識の御教化から吟味して見るに、愈光明の中にすむ身となられたか、なられぬかの目印が凡五つ通ある。

一には、雜行雜修自力の心が捨らぬのが、光明の中に住む身とならぬ印。光明の中に住む身となれば、雜行雜修自力の心が骨折らずに捨る。二には、賴む一念の場に疑が晴れ兼ねて、聽聞する時はわがつた樣なれども、退いて我が心中をながめて見れば、往生の一大事に安堵が出來兼ねて、明になられぬのが光明の中に住む身となられぬ印、光明におさめ取りて貰へば、一念の處に往生治定と落付ける。三には、憶念相續にかけて見るに、往生一定と落付いて喜んで居る時もあり、又時によりては、此では參られまいかと、若存若亡の心を起して時に心變りのするのが、光明の中に住む身となられぬ印。光明の中に住む身になれば、夜

の寝覺に思出しても、野でも山でも思出したら往生一定御助治定、參らう事の嬉しやの思が變らぬ。四には稱名念佛が懈りて行住坐臥に念佛の申されぬのが、光明の中に住む身となられぬ印。光明の中に住む身となれば、お念佛は長忘れはならぬ筈。五には、常々御聞せなされる、王法仁義の掟も守れず、公儀を僞り、親を欺き、夫は妻をたぶらかし、妻は夫の目をかめ、兄弟親類が嘘つきあふて日暮しするが、光明の中に住まぬ印。光明の中に住む身となれば、公儀は勿論、親も欺けず、子もだまされず、兄弟夫婦、知己朋友の中でも、人の目はかすめられうとも、天眼明淨の如來樣の御目には、は立てられぬ。善導大師は『衆生佛を禮すれば、

佛これを見たまふ衆生佛を稱すれば、佛これを聞きたまふ』と仰られた。夜彼方の御前へ、獨御暇乞の御禮をとげるにも、見る人がないと思ふな、青蓮大悲の御眦で、大悲の彼方は見て御座る。夜の寝覺に獨稱る御念佛も、聞く人がないと思ふな、見聞覺知の如來樣は、耳傾けて御聞遊ばして御座る。御禮とげだり念佛申す姿斗を、見たり聞いたりし下さるゝならばよけれども、人が見て居らぬから、此の位の事は大事あるまい、人さへ知らねば、此しきな事は儘よ苦にはならぬと、公儀を僞り親を欺く、其の有樣を見たり聞いたりして御座らせられるのが、大悲の親樣。其の親樣を盲目にするといふことが、攝取のお守りにあづかつた

者に出來やうか、これをよく〳〵思ふて見られよ、餘處の座敷へ呼ばれて行つてさへ、我儘氣儘はならぬ者を、況や大悲の御照覽、眺めてましますと思ふて見たら、光明の中に住む身が、人を欺く樣な振舞はならぬ筈。此の五ッを以て我が心を調べて見られよ、光明の中に住む身ぢやの、住む身とは思はれぬのと、輕々しく思へども、光明の中に住む身となれば、息の切場は淨土參。光明の中に住む身になられば、息の切場は闇から闇の地獄の火の中。眞に一大事といふはこゝぢや。依つて御教化の鏡にかけて、我が心中をよく調べて、愈〳〵光明の中に住む身になられたかなられぬか、若ならられずばならられるまで聽聞して、此の度の往生

を遂げられる樣にせられよ。されば『善知識の仰なりとも、成るまじきなんど思ふは、大なるあさましきことなり、なにたる事なりとも、仰ならばなるべきぞと存ずべし。此の凡夫の身が佛になる上は、さてなるまじきと存ずる事あるべきか』と御一代記聞書に仰られて、愈〳〵茲を大切に聽聞して息の切場にうろたえぬ樣、命のある間に光明攝取の懷に住む身となり、おつゝけ向ふ臨終の夕、如來樣に手を引かれて、眞實報土の往生を遂げ、如來聖人の御膝元で、娑婆で御化導を蒙りました御門徒が、生々世々の永の御禮を、唯今直に申上げますと、いはるゝ身にならねばならぬ。

二に別して個の益を明す五益に初に五雜行雜修自力を離るゝの益を辯ずる

唯今聽聞の通、總じて五箇の利益を辯ずるに、二に別して五箇の益を明すに五、初に雜行雜修自力を離るゝの益を辯ず、唯今申述る通、雜行雜修自力の心の棄らぬのが、光明の中に住む身となられぬ印、光明の中に住む身となれば、雜行雜修自力の心は自ら捨たる。全體此の雜行雜修自力の心といふは、後生が大事になればなる程、此の心は募る筈の者で、後生を何とも思はぬ中は、善根功德に望もなく、我が勤る所に骨も折らず、念佛を勵み稱ふる心にもならぬ。夫が後生の大事に氣が付き、地獄を遁れて淨土へ參りたいといふ心が深くなれば、此も淨土參りのため、彼も後生のためと雜行雜修が募りて來る故に、他力の御

回向が信ぜられぬ。光明に攝取れぬ中は、此の心は捨りはせぬ。夫はなぜなれば、如來の御慈悲を離せば、雜行雜修につかまるより外はない。其の意のないのなら後生知ずの邪見者ぢや、これによりて雜行雜修自力の心は、御回向の信心と取替にせねば離れられぬ。喩へて申さば、今二尺や三尺の處へ飛降りろといはれたら、用心もいらぬ、つかまる物もいらぬ、懷手して飛降るであらうけれども、百丈も千丈もある谷底へ墜ちかゝつた身になると、懷手では居られぬ、木の根でも藤蔓でも、乃至岩角でも、手に觸る程の物につかまらねばならぬ。夫を離せといはれた迚、離される者ではない。其の手を離せば、百丈千丈の谷底へ落ちね

ばならぬから、力一杯つかまつて居る。其の手を離すには唯は離されぬ、何としたらば其の手が離されるなら、そこへ大力無雙の男が出て來て、貴樣は其樣物につかまつて居ても、迚も上へはあがられぬ、助かる事はならぬ、今に力が盡きれば下へ墜るより外はない。サァ乃公が助けてやる程に、我に抱かれよ、其の手を離せ、ソレ抱取るぞやと、彼の大力な男が手を出して、じつかと抱取つてくれた時、やれ嬉しやと縋付き、抱取られた當體に、今迄力に思ふた物は皆離して仕舞。今が夫と同じ事て、後生の大事を二尺か三尺の椽先でも飛降りる位の心持ちて、輕々しく思ふて居る時は、諸佛如來にたのみもかけず、善根功德の用心も

せず參り下向をする氣もなく、香華灯明の御供養もせず之を以て淨土へ參らうといふ、自力回向の雜行雜修も、實に望む心はなけれども、此の度の後生の一大事、千丈も百丈もある谷底へ落るが如き未來の大事、其の落ちねばならぬ身の上になつて見れば、唯うか〳〵と暮しては居られぬ。諸佛如來にも賴をかけ、少なりとも善根功德の手掛りを求め、寺參りするも香華灯明の御供養も、どうぞ淨土へ參りたさの心から我が起行作業につかまる心が起りて、後生が大事になればなる程、自力の心が彌增さねばならぬ。然るを其の自力の手を離せ、雜行雜修の心を捨てよと、聞かせられたとて、未來の大事が恐しければ、中々其の

心が捨てられる者てはない。依て雜行雜修自力の心は唯は離されぬ。如何したならば離されるぞなれば、大願業力の如來樣が、とても汝等の力ては未來は助かられぬ、少ばかりの善根や功德、禮拜供養の營位で、此の度の未來の往生はとても及ばぬ事。おしつけ其の手が弱ると、死んで地獄へ墮ちねばならぬ。サテ此の彌陀が助ける程に、彌陀にまかせよ、我を賴めよと、光明攝取の御手をもつて抱取つて下さる、宿善の時到りて、かゝる者を此の儘ながら御助けの御慈悲はあなたばかり、助けたまへと、如來の御手に抱取られて、光明の懷に入つた時が、此を捨てやう、彼を離そうと分別思慮には、及ばぬ。卽雜行雜修自力の手が離れ

た場ぢや。こゝを御文に『一念歸命の信心のさだまるといふも、この光明のうちにおさめとられまゐらする時節をさして、信心のさだまるとは申すなり』と仰られた。これによりて、愚な者は、これが雜行ぢやの、これが雜修ぢやのと、譯や道理は知らねども、本願のお呼聲が聞開かれ、助けてくれるの御呼聲が聞えて、助けたまへと我が往生を打任せて、如來の攝取の光明に抱取られて見たれば、千差萬別の雜行雜修も、其の一念に殘らず捨たつて仕舞故、雜行雜修自力の心は、御回向の信心と取替へにせねばならぬといふはこゝぢや程に、いよ〳〵こゝの處をよく聽聞申して、迚もかなはぬ自力の手『元廢惡修善は佛法の大體なれ

ば、廢せん〳〵とすれども、廢せざらんはいかんがせん。息慮凝心は諸佛の通誡なれども、やみなん〳〵とすれども、やめられざるはいかんがせん、惡業はやめられず、善根はつとまらず、散亂妄想をやめて、座禪觀念の行も叶はず、しばらく他力をたのむべし、すべからく名號を稱ふべし』と、諸善萬行へ目もふらず、助けたまふは彼方ばかりと、大悲の御呼かけひとつが聞受けられたら、わきひら見ずに眞一文字に斯る者を御助けとは、やれ〳〵嬉しやと喜ぶより外はない。

第廿一會

上來光明の中に住む身になられたか、なられぬかと申す

に就いて、目印が五ッある中、雜行雜修自力の心の離れる趣は唯今申述べた通、因に部類の雜修を辯ずるに、全體雜行雜修は、善導元祖の上では、雜行卽雜修、雜修卽雜行の御取扱ひ、行體からいへば雜行、行者の修する機の方からいへば、雜修と名が付く、其の體唯一ッにして雜行と雜修とをお分けはなさらぬ。然るに吾祖に來りて、善導元祖の密意を探らせられて、雜行雜修の相をお分なされた、其の雜修に又部類の雜修といふがある、此の部類の雜修といふは、金神鬼門の咎ぢやの、方角の祟ぢやの、日の吉凶ぢやの、惡鬼惡神、疫病神の疱瘡神のと恐れて祭る抔が皆部類の雜修ぢや。

校補者曰、斯様に分類する時は、部類の雜修に加ふべき者甚多し、占筮、九星術、天元術、淘宮術、家相、方位、御符、祈禱、禁呪等皆部類の雜修に収ると知るべし。

全體此の部類の雜修といふは、其の體雜行でも雜修でもない。雜行雜修といふは、往生の行に就いて南無阿彌陀佛の一行を不足に思ふて或は戒を持ち、座禪をくみ、又布施忍辱等の行を修したり、お經を讀むのも、如來様へ禮拜御供養を申すのも、夫を往生の行と押向けるのが行に雜物がある故に、雜行ともいひ、修する手前からいへば雜修といふのぢや。然るに金神鬼門を避けたり、八罰家相を見て貰ふて往生を定める者はない。疫病神や疱瘡神を祭つて

極樂參の行と思ふ者はあるまい。依つて其の體、雜行雜修ではなけれども雜修は機の失ちやて、善導大師は雜修に十三の失をお擧げなされた、依つて後生は彌陀一佛、念佛一行、此の世の事は鬼神に祈ふが八罰墨色見て貰ふが、疫病神を祭ふが、雜行雜修ではないと思ふ者がある。そこを御開山様が、雜修は機の失ゆゑに、阿彌陀如來様を禮拜し、香華燈明を捧げるのは、淨土往生を願ふ行者の當然勤むべき正行なれども、夫を往生の力に押向ける心があれば、機の失の方から雜修と名が付く、之に依つて和讃には『助正ならべて修するをば、すなはち雜修となづけたり』と仰られた。其の機の失の方からいへば、現世祈や此の世の物

忌等も、其の體雜修てはなけれども、部類の雜修と名が付くなり。故に『佛號むねと修すれども、現世をいのる行者をば、これも雜修となづけてぞ、千中無一ときらはるゝ』と宣ふ、此のこれもの御言に目をつくべし、阿彌陀如來に向つて供養や禮拜をするのは、其の體か雜修ではなけれども、機の失の方からいへばこれも雜修になるぞといふ思召。

現世祈も亦復是の如し。

時に此の光明の中に攝取られた身になれば、今の部類の雜修抔は骨折らずにすたる、爰をよく〳〵聞ねばならぬ。

當流人數の中に惡く心得た者は、金神鬼門の祟といふことはない事ぢや、方角や日の吉凶といふ事は取るに足ら

ぬ事ぢや、惡鬼邪神は畏れるに足らぬ抔と、一概に心得て居る向もあるが、是は一向譯のわからぬ無法者といふ者ぢや。鬼門金神や惡鬼邪神の祟も急度あるに違ひはなからう、夫はお經の中に惡星降りて國に災害をなすと說いてあつて、御和讃にも『天神地祇はこと〳〵く、善鬼神となづけてぞ』とも又『天地にみてる惡鬼神』ともあるて、此の天地の間には善神もます、又惡鬼神もすんで居る。廣くいはゞ梵天、帝釋、四天大王、我國で申さは天照皇太神宮、春日明神、石清水八幡、熊野權現、諏訪明神等の神々は、御本地は皆佛菩薩にて御坐らせられ、國民を守護したまふ善鬼神。其の外にいろ〳〵の惡鬼神もある、上國王より下萬民

に至るまで、善事を好めば、善神が力を得て天下泰平に治る。衆生が悪事を好めば、悪鬼邪神が力を得て、國に災害を降す故に、大地震ぢやの海嘯ぢやの飢饉厄病抔と種々の災が起る。喩へて申さば、家の主人が善事を好んで後生を願ひ、正直正路にして孝行を盡し、人間の道を正しく守れば、一門親類村處に悪い者があつても寄附かぬ。善人が寄集りて家も繁昌し、子孫も榮えるが、主人が博奕打つたり大酒呑んで悪事を好めば、親類縁者でも善人は寄附かず、村内の破落戸や悪黨が親近附いて來て、終には家を亡ぼし身を喪ふ樣になる。今も夫と同じ事、衆生が善事を好めば、善神が其の國土を擁護する故に、悪鬼邪神は近寄る事

が出來ぬ。衆生が悪事を好めば、善鬼神は愛想をつかして去つて仕舞はつしやるで、悪鬼邪神がたよりを得て、種々な災害を降す事は急度違ひはない。併夫を又除く法もある、是が加持祈禱ぢや。夫を當流人數の中に於て心得違の者があつて、加持や祈禱が何に成らう御符やお守は紙屑同樣ぢや抔と無法をいひたがるが、夫は大なる心得違といふ者ぢや。鎮護國家や現世の利益をお說きなされた經文は數々ある。法印阿闍梨の加持祈禱なされた御符やお守に利益がないならば、佛說は嘘になる。あちらの經說が嘘になれば、彌陀の本願を說かせられた、淨土の三部經も嘘になる。外のお經の說法も如說に修行すれば、各々其の

益があればこそ、大經所說の彌陀の本願も明に信ぜられるでないか。爰をよく〳〵聽聞申されよ、當流で鬼門金神や吉凶方角を見るな、惡鬼邪神を祭るなと仰られるのは、ない事ぢやに依つてするなと仰られるのではない、加持や祈禱に利益がないで信ずるなではない、彌陀を賴んだ念佛の行者は、信の一念に攝取の光明におさめ取られまゐらする故に、寢ても寤めても、光明のお守りにあづかる而已ならず、三世諸佛の本師法皇、諸有神々の御本地たる阿彌陀如來樣が、十方の諸佛菩薩を引連れて、晝夜お守り下さるゝ身の上なれば、『天神地祇はことゝく、善鬼神となづけたり、これらの善神みなともに、念佛の人を守もるなり』『願力不思議の信心は、大菩提心なりければ、天地にみてる惡鬼神みなことゝくおそるなり。』『南無阿彌陀佛をとなふれば、十方無量の諸佛は、百重千重圍繞して、よろこびまもりたまふなり』等と仰られた、又歎異抄の中には『念佛者は無碍の一道なり、そのいはれいかんとならば、信心の行者には、天神地祇も敬伏し、魔界外道も障碍することなし』とも仰られた。此の理が明に信ぜられ、光明の中に住む身となりて見れば、外をけなるがる事はない、依つて蓮如樣は『さらに何の不足ありてか、餘行餘善に心をとゞむべきや、すでに南無阿彌陀佛の名號は、萬善萬行の總體なれば、いよ〳〵たのもしきなり』と宣ふ。

能く思ふて見られよ、金神鬼門を除ける加持祈禱もあらふ、疫病神や不時の災難をのぞくお守や護符もあらうが、十悪五逆の罪人や五障三從の女人が、息の切場に火の車の迎の來るのを除けるお守や護符は、大千界を尋ねても外にあらう筈はない。サア地獄の火の車さへ寄附く事のならぬ念佛の行者、悪鬼邪神が指でもさゝれる事ではない。此の道理がきこえぬ故に、我も信じた誰も聽聞したといふが、實に光明の中に住む身となるから、疫病でも流行て來ると、兄弟親類の中でも影のぞきもせぬ樣になり、蒜を懐中して居れば、疫病神が畏れるの、鰯を門口へ下げると疫病が除けられるといふて騒ぐ、攝取の光明の御利

益を蒜や鰯ほどにも思はぬ樣な心中の者が、臨終の今際に臨んで、喜び〳〵極樂參りがならうかなるまいか、爰をよく〳〵思ふて見られよ。今世で僅な悪鬼や邪神におびやかされて、うろたく樣な心で、息の切場に向ふたら、どうあらうぞ、識心困窮し心倒亂して正念を失ひ、信心亂失して地獄の湯玉の中へ飛込まねばならぬ。今日の聽聞は凡夫が佛になる大事なれば、確と聽聞して、平生から光明の中に住む身となり、何時臨終に向ふとも、うろたかず二の足ふまず、喜び〳〵淨土參りの身となられねばならぬ

校補者曰、或時同行が或る僧に問ふには、御當流では現世祈は堅くお誡とは承知して居りますが、從來の習

慣て日の吉凶や方角の明塞抔が、何となく氣にかゝります。又兒供でも病氣になると、自身でお願はしませぬが、これが御禁制でなかつたら……と思はれますが、御教化を思出してジッとこらへさして戴きますと。僧答へて曰、夫はいらぬ事ぢや、家相方角日の吉凶も見てもらい、隨分加持祈禱もするがよい。全體眞宗で現世祈禱や吉凶卜筮をせぬのは、病人が毒忌する樣な心持でするのではない、滿腹なれば何程好物な御馳走を强られても喰ふ氣にならぬと同事ぢや。お前のは見て貰ひたけれども、辛抱して賣ト者に見てもらはず、願ひたいけれども、我慢して現世の祈をせぬといふので、腹がすいで

居るのぢや。すき腹で辛抱するのと、滿腹して喰へぬのとは違ふ、すき腹なら喰ふたがよい、現世祈でも占筮でも御籤でも勝手にやんなされ、其の代には、死んで極樂へ參れぬ事丈は覺悟して居らねばならぬと諭されたといふ、世の毒忌的に現世祈せぬ人々は、心をしづめて此の法話を熟讀せらるべきなり。

第廿一會

只今聽聞の通、光明攝取の懷に住む身となれば、現世禱や婆婆の物忌は自ら捨たる道理。御和讃の御意、御文の御示御尤至極と、道理は隨分聞えたが、爰に愚者の惑ひなる事がある、其の譯は現に金神鬼門の祟が現れ、疫病の神に取

りつかれる事、抔が、目の前に在る事故に、愚な者は是ばかりは此の方の宗旨でも、無理には押されぬ抔と申して、其の心を捨て兼る。勿論何宗の者ぢやとて、宗旨の株で悪鬼邪神を押付けられ様道理はない。眞言宗の九字護身の法といふがあれども、夫を受守らぬ者が、災を遁れる筈はないと同じ事ぢや。當流でも信も得ず、光明の中に住む身とならぬ者が、悪鬼邪神の祟りを受けぬとはいはれぬ。依つて光明の中に住む身とならずば、現世の祈、此の世の物忌、如何なる事でも勝手にしたがよい。併しながら夫位の心中では、淨土參りも叶はねば、今死ねば地獄より外はない、そこで篤と思案して、信心を決定し。光明の中に住む身と

なりて、此の世も神明權現の御守りに預り悪鬼邪神の災も遁れ、未來は淨土へ參る身となる、此程の仕合はないではないか、然れども凡夫といふ者は過去と未來の事が知れぬ故に、今眼前に災難でも起ると、夫に驚いて騒出す爰をよく〳〵聞かね、ばならぬ喩へば祓ひたまへ、清めたまへと、日々現世を祈つて居ても、悪事災難の免れぬ事もある。今も攝取の光明におさめとられた念佛の行者でも、過去から定つた業は免れられぬ。是が決定業といふ者ぢや、こゝに至ると、神や佛の御力でも及ばぬ。既に京都の比叡山は、王城鎭護の靈場で、王城の鬼門を守り、山王七社が守護なされる御山なれども、兵火のために燒かれ、愛宕の權

現は王城火防の神なれども、天火のために燒けて礎ばかりになつた事もある。愚な者が考へたら、山王七社の神に鎭護國家の利益がない樣に思ひ、愛宕の神に火鎭の力がない樣に思ふまい者でもないが、其は勿體ない事て、山王七社の權現に鎭護國家の力がなくては濟まぬ。愛宕の權現に火防の力はましますに相違はなけれども、過去から定る決定業は、此の如く、神の力でも遁れることは出來ぬぞと、お知らせなされるお慈悲ぢや。さればこそ、日本中の神々が守らせられる禁裏御所が、御炎上なさるゝ事もある。是皆我等に業因業果の轉じ難き事をお知らせ下さる、神明の御慈悲ぢや。故に假令攝取の光明の中に住む身と

成つたとて、過去生から定まつた決定業は遁れられぬ、別して念佛の行者は、今生が生死の終、迷の打止めなれば、罪業の根が切れねば、淨土へは參られぬ、故に受けねばならぬ決定業は、皆此の世で受けさせて、業の根切りをさせて淨土へ參らせて下さるゝ事なれば、信を得た者は善い事ばかりあらうとは思はれぬ。此の世を迷の仕舞として、諸有業を皆盡す故に、信心の行者の身の上には、種々の惡い事が重なつて來る事もあらうけれども、そこを驚かずうろたかぬが、光明の懷に住む身と成つた身のしるしぢや、譬へば、京や大阪から、當國へ年々商に來る者があらう、去年も來た、今年も來た、又來年も來るといふ樣なれば、貸し

た物も借りた者も、勘定の殘りは又來年と延べて置かれる。然るに今年がもう此の地の暇乞、再び來ぬといふ時になると、借りた丈は殘らずやらねばならぬ。又取る丈は殘らず取つて、帳面の仕舞を付けねばならぬ。今も夫と同じ事で、娑婆に迷ふて居る者は、今生で殘つた業は、又未來へ送ることも出來る、依つて業にも順後業ぢやの、順不定業ぢやのと、後へ廻して受ける業の緩があるが、念佛の行者は、今生が生死の結局、娑婆の來納、一ト度淨土の蓮臺で眼を開いたら、不更惡趣の御本願があるから、二度の迷の身にはなられぬ、今生が迷の打止なれば、受けねばならぬ決定業は、此の世で皆受けて仕舞はねばならぬ。併し爰に有

難い事のあるのは、念佛の行者は、如來樣の御力で、轉重輕受の御利益をお施し下される故に、重く受くべき業を輕くして、此の世で皆業をはたさせて仕舞て下さるゝと、法然聖人は仰られ、又御開山樣は『三世の重障みなゝがら、ならず轉じて輕微なり』と示させられた。輕はかろく微はすこしといふ字で、重く多い業をかろくすこしにして受けさせて下さるゝと宣ふ事ぢや、譬へば、今年が此の地の仕舞なれば、十兩拂ふ所を二兩か三兩でも、夫て帳面消して貰ふ樣な者で、重き業を轉じて今生で仕舞はせて貰ふて、障も業もない身にして、淨土へ參らせて下さるゝ、此を轉重輕受の御利益といふ。併し吾人迷の凡夫では、どれが

重い業の輕くなつたのやら、どれが定決業ぢやゝらわからぬ。そこで先わかる所で申そうならば、餓鬼道へ沈んで、五百生も千生も食物の名も聞かれぬ處に在つて、飢饉飢渇に責められねばならぬ者が、今生て貧乏で暮すのは、未來の餓鬼道の苦を今生の貧苦に轉じかへて下されたのぢや。又地獄へ墜ちて湯玉の中で煑られたり、鐵丸銅汁を飲んで苦しまねばならぬのを、わづかな怪我や病氣で帳消しさせて下さるゝ、此の世の中は、行業果報不可思議で、凡夫には一々わかり兼れども、先世間を見渡すに、御上の掟もよく守り、親にも孝行して、御法義をも喜ぶあの人ならばと思ふ樣な人が不仕合が重つたり、貧苦に責められ

て居る者が數々ある。又御法義も篤く喜び、善知識をも敬ひ、慈悲善根もつとめた人が、求死不得、求生不得と死ぬにも死ねず、生きるにも生きられぬ難病にかゝつて難義して居る人もある、夫を見るとあの人達にあんな事はありそもない者ぢや、して見ると佛樣の仰られる事もどんな者やら抔と、因果の道理の不審が起る。又別して我身の上抔に重ね〳〵の惡事災難でも來ると、乃公も御法義を聽聞して、成るべき丈は善知識の御意も守り、御上の仰にも背かぬ樣に心掛けて居るのに、何の因果で此の樣な目に逢ふことやら、如來樣の御慈悲にも見捨てられたのではあるまいか抔と、勿體ない我が過去の業をも顧ず、却つて